主幹・麻生路郎

川柳雜誌

十二月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和三年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第五卷 第十二號

川柳雜誌社發行

十二月例會

▼日　時　十二月七日午後六時半
▼場　所　南區日本橋一丁目交叉點
北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼　題　「姑」三句
▼會　費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

年賀名刺廣告を募る

▼奮つて申込まれたし▲

◎一口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一口分の原稿はなるべく簡單にお願ひいたします廣告料金は前金のこと。

申込期限十二月十日迄（新年號掲載）

大阪市住吉區杭全町六〇三
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします、柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引　け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第五卷第十二號　目次

慈善鍋（表紙）　柴谷柴舟
題字　小出楢重
編輯後記　路郎、ひろし、二柳子

創作

川柳塔
庄萬よし　岩崎柳路
三好革郎　松盛琴人
酒井駒人　橋本二柳子
龜井花童子

○

松丘町二　水谷鮎美
中島鐵洲　安西杏三
中野柳陽　住田亂耽
朝田新水　石川双葉子
楊井二南　詫間三猿堂
中澤濁水　松並光哉
中見光路　島田翠峯
水田黃彩

粒々集
大島濤明　柴谷柴舟
安川久流美　富士野鞍馬
長崎柳秀　神尾三休
近作柳樽　諸家

感想・評論

喘鳴の後　蛭子竹馬居
路郎氏を繞ぐる人々　佐々木三福
川柳を撫でる　岩本素人

研究・其他

面白さの要素　三好革郎
獨往漫觀集　長野晴濱
古句質疑　蛭子省二
月　路郎、紋太、素人
評　山雨樓　ひろし

松茸の句なき記　安井ひろし
大磯吟行　下田美智坊
面笑子翁逝く　安西杏三
大震子兄を悼む

一路集（募集句）

臺所　椙元紋太選
藥局　佐々木三福選
暖爐　宮本銀砂子・庄萬よし共選

支部聯合御大典奉祝句會　安井ひろし
川柳家戸籍調べ索引
各地柳壇

近作柳樽

路郎選

ハンチングいきなり友に値を踏まれ　大阪　梢雨
丙午自活してみる氣にもなり　同　同
寄席へでも伴れて戴く櫛を入れ　同　同
松葉杖キヤツチボールを見て通り　同　同

次女を娩む（一句）

慶びのこゝへ小さう誕れて來　同　壽仙
氣短と云はれ淋しさ一つ殖わ　同　同
芋助と云はさぬ程に子を育て　同　同
心からの奉祝服のまゝ踊り　同　同
何もかも買はねばならぬ世帶なり　同　武子
病人に彼岸々々とたのしませ　同　同
紫の着物に雨の降る女　同　同
親子して何か話して乘り遲れ　同　同
神經だ神經だとて慰める　鳥取　穂波子
擲つたり頬ずりしたり子は育ち　同　同
肉身の催促すれば腹を立て　同　同
いゝ柄へ吾が兒が浮ぶ親女　同　同
夫婦また客が歸れば相反き　豐中　閑生
退いて不平進んでお詔ひ　同　同

菊畑に木彫りのやうな翁ゐる　同
草に寢れば草の實が着くばかり　同　かい痴
佛より矢張り醫者を信じて居　大阪
錢の音あんな人まで振り返り　同
明日返しますと云ふのに斷られ　同　佳水
破門してからの師匠のやつれよう　鳥取
裏門に今日も直しの鉋屑　同
孫の嫁金婚式の酒をつぎ　同
金のこと言ひますまいよ枕許　鞍山　草明
滿足な手足を持つてさわ喘ぐ　同
轉勤と聞いてか屑屋もう來てゐ　同
朝鮮の姉案外な若さで來　大阪　蒼梧樓
出そびれた朝丸善へ寄つてみる　同
戀をしに行かむしつかと帶をしめ　同
賃を出すとは友情を無視したり　島根　花情
家出した罰だと脚氣思ふて居　同
愛すればこそ氣の儘にさせてます　同　神戸　東洋鬼
さはあれど娼婦の肉の温か味　同
善人の無智に苦しめられて生き　同
子が死んで今日で七日の虫の聲　同　尼崎　吟女
嬌笑を殘して扉とざされぬ　同

子を失ひし姉に（三句）

童謠へ窓をあけしも幾度ぞ　同
天國に赤い帽子もあるだろか　同

機嫌取るこ兄は教へるかこ思ひ　丸亀　柚爾坊
演習の兵士に山は澄み切つて　同　同
古い先生だ向ふも忘れてるだらう　同　裸ん坊
朝つから出前が居くやうな家　東京　同
寒さうに輪まわし露次を鳴つて過ぎ　同　同
榮轉にその愛犬も汽車にのせ　同　鞍山　可樂
御榮轉ですよこ涙ふいて居る　同　同
信仰もよいが借金ごうするか　同　同
いたづらで困る寢顏こ思はれず　大阪　方可
臺所女中は癖を見付けられ　同　同
寂しければこそ看護婦もして居ます　螢ヶ池　湖舟
母親に賴られる程淋しくて　同　同
逢曳に何か女の包みもの　松江　雪緒
種になるだけのコスモス丈があり　同　同
病人の額をさはる程の中　神戸　市公
長わずらひお大切にを聞きあきる　同　同
日稼ぎの子に諦める事多し　金澤　三波子
出た卦をば信じ切つてるのも憐れ　同　同
廻り燈籠家へつくまで母のもの　神戸　松月
新聞を見てから水が鰻に見ゆ　同　同
遊ぶ事だけ父に似る不孝者　長野　高峯
負けまいこする意地だけで今の位置　同　同
貸さぬこも貸すこも云はず夜になり　姫島　二竹
拗ねてるるのか縫ひもせず寢もやらず　同　同

竹トンボよう飛んだのが樋に落ち　大阪　幸泉
悪い事は捨て生んか兄弟よ　同　同
水馬默想の愚を眞似るなよ　函館　白眼子
殺されるまで信用を強ひられる　同　同
下駄箱の隅へ人形の手が轉ろび　神戸　重陽子
石僅か動いて植木屋畫にする　同　同
なり振りを構つた時も有つたのに　桑港　敏郎

桑港ゲリー街に大雷燈つく

辻君を嘲る樣に灯がこもり　同　金澤　好次
つんとして女は髪を匂はせる　同　同
處女と云ふ誇りは悲し掏摸にして　同　たしろ
驢市へ今日も家運の傾く荷　同　同
スカートに靴音に若さ躍つて居　同　同
無理もなしかかる世帶の母のぐち　大阪　露斗
拾七を女車掌となりおうせ　同　同
いさかいの中へ娘が戻つて來　同　桂風
烏打ちをよぶ烏打の背の高さ　同　同
腹の立つことばかりなり古手紙　嶋根　綠之助
食べ物のことを話して母うるむ　同　同
柿の實が熟れて其所まで徑がつき　防府　清流
罪だつたことを女にうちあける　同　同
僞物へ暇な散歩の人を寄せ　神戸　千年
玉突場涼みの人を覗かせる　同　同
金借りに往つてサラリーきかれて居　尼崎　虚白
出來た袷をだるう見て臥して居る　同　同

賣り喰ひの二階ごうやら切れ話　大阪　伴内
見合の娘老けて寫つて氣が弱し　同　同
思ひ出の一つ身もある支那鞄　大阪　呑陽
野を行けば蛙の戀に眼敏くて　同　同
他所の子を世話して後家を通す氣の　同　凡平
醉ふた父闇講へうなづくばかりなり　同　同
商人の幸朔日の朝にあれ　長春　菱明
佛壇を飾る氣樂な金が無し　同　同
こほろぎの飛ぶにすさつた美しさ　神戸　卯生
只一人朝霧吸ふてゐる肥屋　同　同
小使は家の火鉢へ寒く寄り　東京　三猿
雜談へ小さく笑ふ新幹事　同　同
玄關で足袋脫ぐ客へ道の事　神戸　志郎
下女にやるのだと奥さん振つて買ひ　同　同
足音に藥局窓を開けて見る　大阪　柳狂
トラックで檢束される爭議團　同　同
怒つてるやうに受付窓を閉め　姫島　觀月
腰かけただけの石だが名を殘し　同　同
うちの子が氣にもかゝるが髪を結ひ　大阪　賀名芽
アンテナの影も彼岸の入りらしい　同　同
お隣りの子の眞似をする兒を叱り　同　陽喜亭
同商賣親しい口で探りあい　同　同
問題になりダンサーもして居れず　神戸　嶺月
爪の垢ほど儲けるに嘘をつき　同　同
手あぐれば私線乘る迄待つて吳れ　筑前　鄕川

さしのべたわれに背向くる恩師の兒　同　新一郎
秘密の手紙ならんあのあはてかた　大阪　素萠
古屋敷ばらん昔のまゝ茂り　同　太閤
骨壺のその日限りをおがまれる　同　悟空
古本屋切つてあるのを見逃さず　石川　錦水
冷靜になつて已れの愚を悟り　小松　柳介
寂しさを詠んで女にめぐまれず　東京　雨月
そば一つ喰つて思案をするも暮　大阪　吉五郎
失策をして故里を思ひ出し　同　雪峰
すぐそこの略圖が遠い移轉先　京都　喜公子
金の無い時に吹いてるハーモニカ　丸龜　糖醉
來る度に又呉れるかと思ふ子等　大阪　ワン公
病氣した時をごうする此の暮し　近江　たけし
五分々々に分けて繼母慕はれる　尼崎　風鈴
極月を辛氣臭さふに一人住み　小松　松水
我いまだ金の汚れを見い出せず　安東縣　花蝶
暮には上るさ餅米を買うか　堺　太路
緊張をして飛乘りの顔になり　大阪　呵々子
歸鄉せば枯木の如く母おはし　同　柳笑
誘惑に勝つて變人にされて居る　同　江帆
掛時計遲れたまゝの時を告げ　同　しかぢ
國難を說いて儲けるうまいこと　山口　恒子
運動會選手一人にたよるなり　大阪　靜香
大丸の話に女房まけてゐず

宿引きは見當つけてお辭儀をし　同　吐句坊
團体を田舍の子迄馬鹿にする　螢ヶ池　波紋
傘車面白がつて叱られる　山梨　一笑
話合つて見るゝ故郷の人であり　大阪　一舟
朝歸り汚れた靴を履いて居る　同　秋
壓迫を感じて返事だけをする　神戸　一始
腰辨の苦にならぬほど貧しくて　大阪　銀水
離緣された罪は親にも有りは有り　金澤　風流子
青春を金で買ひ取る人となる　西宮　南窓
喧嘩した子供我家の前で泣き　大阪　久二子
坊んさんも凡人だんが現代は　鳴尾　珍郎
もく〳〵と働く父の脊のまろき　大阪　琴水
言い譯にそこらの物をかたづける　同　忠八
がんばつた五十女の坐りよう　兵庫　よし源
思案から思案へつゞく線を引き　長春　東狂子
九分九厘出來た緣談　丙午　大阪　桂枝
末つ子の頭をなでて客歸り　同　樂鳥
白暴自棄で來た國境に松をうゑ　朝鮮　東狂子
棟上げへ愈々つのる寒い風　大阪　一杉
のめぬ酒のんで調子をあわすのみ　同　籬楓
煽風器主人の方へ風が行き　同　丸葉
芒だけ取つて歸つた病上り　神戸　鐵菴
同輩に白髮があるゝ指摘され　堺　露路

喘鳴の後

橋本二柳子雅契に寄す

蛭子竹馬居

小妻が洗濯をして、干した。

一時間半も經つと、天墨を流せし如くかき曇り、遠くで轟々たる音がする。大粒の雨が旋風に誘はれ、前庭の絲瓜棚を捲き倒し、暫らくは怖ろしい宇宙になつた。

今年は不出來で、十本許り下つた絲瓜が、一つ一つ腐つてゆくのを、私は惜みつつ眺めては、

叱られる口に絲瓜の十許り

川柳詩人の風景は、古川柳そつくりだらう、なぜと客を煙にまいて、獨自を清高にして居たのであつた。

丁度其の一ト騒動が終つて、風がないだ頃から、こみ上ぐる喘鳴に苦しみ、床上轉輾、自らはアドリナリンの吸入、醫師はパントポンの注射。

看護にも出入にも、不便だからと、少し寒くはあい、モウ蚊も出はしまい、昨年より早くはあるが、蚊帳をやめた、其夜絶對禁物の風邪をひき添いてから、連續の發作。

支那の旅館では年中木棉の蚊帳をつる處があるそうだ、蚊除けではない保溫の爲めと聞く、理に叶つて居る。

歳々病は同じ　年々苦み新なり
我ひとり餓鬼に生れて　句を作り

一日で痩てしまふ、餓鬼以上は何んだ、それだのに今度は顔面丈け腫張、眼を開けると頭を針で刺す。

枕頭野菊を活けさせる、私は野菊が好きだ、菊は朝鮮が本元だなぞと云ふ、元祖爭ひは罪がないものだ、

賛しき竹馬居

鉢ぐるみ菊を貰らつて雨が漏り

庭の澁柿を小妻が竿で落し、老母が丹念にむいては、軒端に

吊るす、

『澁柿奴、此の病人の提灯行列をやつて居るワイ』

お見舞客から、國々の色々な澁抜法を、教わらる

澁柿にくひつひてみる者もある。

女房子を棄てた男澁柿をくふ

◆

廢兵のお方が筆三本を束にして、一圓五十錢で買へと立板に水で說明を致される　折角病人が眠つてゐるからと、ハラ〳〵するも軍人さん丈けに聲が荒高い使用し得ないヒドイ筆なので

『おいくら程お儲けになりますか？』

『一圓五十錢の一割と云ひ度いが、タッタ十錢……』

『それでは洵に失禮ですが二十錢差上げますから、二タ組お賣になつたおつもりで、お歸り願ひます』

家族の機智としては仲々上出來だ、がそうはいつも向ふが乘らなくなるだらう。

◆

『ハヽヽヽ、同情ある名ですネ、病苦に對して……サア水劑の時間です』。

三十分後お粥をもつて來た、

『チリレンゲ、詩的な名だナア、病人に對して……ドレ一杯頂戴しようか』

こんな皮肉らしい相槌も闘病心理の現れである。

◆

午前午後二回内地便の配達がある玄海の連絡船が二度だから

『お宅は光州で一二です』と、一ト束廊下へ投込むだ音がする

『どこが一番多いのですか』

『サア、商賣人では驛前の運送店ですがネ、こうひつこんだ家では、お宅は仲間で評判な噂です』

障子越に聞ける、若いお世辭よしの配達夫！、まさかそんなでもないのだが、日信の友もあり、連續葉書の通信者も三四名江戸川卷紙一本分なごは變態、ごんなに苦しくても、之れ丈けは直に眼が通したい、返事が書きたい時には醫師の注意で一時隱される事もある。

◆

夢をよくみる、纏まりのつかぬのが夢なのだらう、惡夢、怪夢。

三つは結末がついてゐる、一つは餘りに馬鹿げて居る。

（A）ある高貴のお方から、明日帽子をやろうと思ふから取りに來たらよかろうとの御事、早速袴をはく稽古をして置うと起ふしても病氣の爲め腰が抜けてたてない、サア大變だと工夫して苦しむで居る内に、谷底に落ち目が醒める。

（B）飛行機で富士山頂を飛んで新聞社の前に下りた處、群衆に圍まれ感想を尋ねられる、そこで川柳の狂句の詩的差異はとボツ〳〵やり出したら、そんなつまらぬ事ぢやないと野次がはいる、僕はかまはず

（三五頁へつゞく）

面白さの要素

……二本のネクタイ……

三好革郎

◆人間と人間との有機的關係ぐらい面白いことはない、嚴格な人の前に出ると、窮屈な感じがし、寛容な人と話をしてゐると春風自ら湧くの感がある。これは科學的に說明の出來ない所謂人格の反映だと思ふ。

◆川柳でも面白い句と、嚴肅な句とがある。それは作者の人格の表れであると思ふ。その面白い句が値打が無くて、讀んで穢を正しうせなければならぬ句が良いとは云へない、それは違つた方向に走つてゐる二線を比較するやうなもので、比較評價出來ないものを無理に評價するやうなもので、間違つたことだと思ふ。故に面白い句は面白い句として價値があると思ふ。

◆川柳の面白い句は、何故面白いかと云ふことを考へて見たい面白いといふことはどんなことかと云ふことを先に決定してから　次に何故面白いかと云ふ問題に移らなければならぬと思ふそんならどんなことが我々に面白く感じられるかと云ふと、話しをしても、句を見ても自然に顏面筋肉がゆるむことである。然らば顏面筋肉の中のどの筋肉がゆるんだ時が我々は最も面白い感じを抱いた時かと云へば、口の周圍の筋肉が伸びた時である口の周圍の筋肉が伸びた時には人は笑つてゐるのである。即ち笑ひを催すことが面白いことであると言へる。

◆我々が笑ひを催すことは種々なことがある。この笑ひの要素が又面白味を我々に感じさせる要素になると思ふ。

◆僕が或時カフエーで女給に『君のやうな處女がこんなところ

に居るこ云ふことは全く奇蹟だ』こ云つたこころが女給は妙な顔をして『奇蹟つて何だす』こ尋ね返す『漢和大辭典を引いて見たら分るよ』こ云ふこ『漢和大辭典てどんなもんだす』こ更に聞き返してくる。この奇蹟も漢和大辭典も知らないことが女給が美しいだけに、僕には非常に面白く感じられた。何故面白く感じたかこ云へば澄ました顔をしてゐながら何も知らないこいふことに無限の面白味を感じたので、その徹底した無知さ加減である。つまり知つてゐるべきことを知らないこいふこころにある。

◆僕はあはて者でネクタイを一本ワイシャツの後へ垂らした上に、又一本ネクタイをして濟まして出勤した、所が暑い時のこで上着を脱いでワイシャツ一つになつて仕事をしてゐるこ皆んながクッ〳〵笑ふ。何で笑ふのかこ言ふこ『君は一體ネクタイを何本したら氣が濟むんだ』こ云ふから『一本しかしてゐないぜ』こ云ふこ『後に下げてゐるのは何かね』こ言はれて始めてネクタイを餘分に一本携帶に及んでゐたことを知つて一緒に笑つた。

◆何故これが皆んなに面白く感じられたのかこ云へば普通より餘分なことをしてゐたからだこ思ふ。

◆人の癖には實に面白い癖が多い、僕の女房は實に大きな鼻を所有してゐる。所謂團子鼻である。その鼻がこても氣になるこ見へて話しに夢中になつてくるこ、その偉大なる鼻を平常でこすり出す。つまり、話に身が入つて來たかどうかのバロメーターは鼻をこするか、こすらないかにある。『そうら始まつた』こいふこ本人も笑い出す。これは普通の人がしないことをするからである。

◆僕の知人に久保菊子こいふ産婆さんがあつた路郎先生のここのアート君こリリちゃんを取り上げた産婆さんである。この産婆さんは實に偉大なる體格の所有者で、堂々二十貫の女丈夫である。この産婆さんの一人娘に幸子さんこいふ女學生がある。この娘さんが僕の家へ遊びに來た時に家内の目方を聞いて『おばちやんはタッタ十四貫、うちのお母さんは二十貫よ、おばちやんは輕いのね』こいつて如何にも輕いやうに言つたので大笑ひをした。幸子さんにこつて見たらお母さんが普通で、それでないものは異例こ信じてゐるこころに無限の興趣が湧く、この異例を普通こ信じきつてゐるこころにユーモアが感じられる。

◆この面白いこ感じることの要素はつまり普通でないことである。當り前のことを破つた、破格なことに面白さを感じるのだこ思ふ。川柳がこうした方面を詠むこともその特長の一つであつて、川柳の持つ面白さもこうしたこころを發見し、詩にするこころにあるこ思はれる。

獨往漫觀集

獨往路難盡　窮陰人易傷

長野晴濱

乞食と酒

乞食も悪かつたんです
友田が投げてやつた五錢を
握る・直ぐ
前の酒屋へはいつていつて
それで酒を呉れと言ふんです
濟みませんが之れだけつてね。
往きかゝつた友田が
いきなり引返したと見ると
ほかほかつ
そりや好い音がしました。
ほかほかつ
あの大きな拳固でやられちやたまりま
せんや
御免なさい御免なさいつて
乞食もさすがにあやまりました
自分でも悪いと思つたんでせう。
參詣道ですから
外にも大勢乞食がゐるんですが
みんなほかんとした顔して見てゐまし
たが
所が直ぐ人だかりがしたんで
乞食どもはまた聲を張上げて
右や左のお旦那さまあです。
可哀相でしたが
でも乞食も悪かつたんでさ
一時は中々の大騒ぎでね

友田の奴あ純な正直な男ですからな
友田といふ好青年のゐる
製本屋の主人の話だ
だが乞食は果して悪かつた
のだらうか
乞食は殴られても仕方がなかつたのだ
らうか
あやまるのが正しかつたのだ
らうか
外の乞食たちも默つて見てゐて
よかつたのだらうか

（一九・二八・九・二五）

ばつた

番頭さん
宿屋の番頭さん
私はあなたに
親切にして貰ひたいと言ひます
だが併し
そんなにばつたみたやうに
肘を張つて
頭をすりつけて
そんなにへい〳〵して欲しいとは
言ひません
どうかやめて下さい
そのばつたみたやうな奴を
どうか斷じてやめて下さい
あなたの男にかけて
私の男にかけて

（二八・一〇・一八夜 高松の宿で）

寢ざめして

曉ふかき
旅の寢ざめの淋しさよ
おゝ、あの
ばつたのやうにお辭儀する
番頭のさびしさよ
おゝ、あの
ばつたのやうにお辭儀されて
どこかで喜ぶ
その人たちの淋しさよ
おゝ、あのこほろぎの身の
あの風の行手の淋しさよ
寢ざめして
寢床にはらばひ
こんなものを書く
自分といふものの
さびしさよ

（二八・一〇・一九 未明高松の宿で）

川柳塔

○　庄萬よし

純情は認められたる梯子酒
初紅葉國寶を見て外は雨
薄情に見せて一生添ふつもり
乘合のスピード村の子を分ける
重任を果した巡査列で來る

○　岩崎柳路

洋服屋のモデルの様に服が合ひ
眞直に〳〵あんま歩く也

○　三好革郎

夜なべする足に冷たい油虫
これしきと思つたことに行詰り

○　龜井花童子

賜饌に召されて
平民にまでも御心垂れ給ひ

○　松盛琴人

人の非を云ふほど俺が正直か
張りつめた氣へきぜはしさつゞく也

○　酒井駒人

子のたつたこと話す仲居に夜が長し
柿取つた子等縣道を横にそれ
驛からは乘合馬車のつづく里
貸席の主人畫だけ廣く住み

○　橋本二柳子

もう一度見て來いに使走り行く

◇　松丘町二

戀敵シラノがついつてゐるらしい
さもあらばあれと最後にほめてをき
滿腹のいつそ疲れを押し默り
硝子戸の風の白さに默りがち

◇　水谷鮎美

恩人へ出す座蒲團に父笑ひ
强情な手紙が屆く十二月
隣から秋の日和の柿をくれ
善人の姿一せん飯の朝
十二月妾の膝に花かるた
いつしんに戀を守つて湯ざめする

◇　中島鐵洲

葉鷄頭は大屋の壁を染めんとす
殖林の視察を宿でして戻り

◇　安西杏三

求職にひんやりとした應接間
泊れとも云はずあによめ縫ひ續け

◇　中野柳陽

たぐり着く椅子が冷めたくぬれて居る
反抗を捨てぬ間のチウインガム

◇　住田亂耽

寒い小驛へ酌婦下りゆく
アトリエにわが光明を見失ひ
起き拔けを大根役者の薄化粧

◇　朝田新水

金のある素振りに友のおろかしく
覺めかゝる戀にも似たる秋の空

御大典（二句）

目出たい日もう奉祝の灯に疲れ
屹度ネの握手そのまゝ葬むられ

◇　石川双葉子

二兒を殘して友は死せり（二句）

病床の日記に友の口語歌
白無垢に抱かれガラ〳〵振つてゐる

御大典の大飯（二句）

奉祝のみんなまけない街となり
兩親も娘もほれて〳〵ゐる
御大家を出るミズボンが丸うなり
手土産のなければならぬ樣にされ
北濱の軒で運勢の本を賣り

◇　楊井二南

葬式を見んとて背伸びしたりけり
舞台から見る人間はよく笑ひ
云ひ負けた女貰ふて了ふなり

◇　詑間三猿堂

老木の精か邊りは氣味惡し
温泉湯何か利く氣で呑んで見る

◇　中澤濁水

看護婦の薄情らしくもうなれて
手を腰に巡査「休め」の人通り
小料理屋巡査なれ〳〵しく話し
教員室式後の花瓶持ち込まれ
共稼風邪で寢るのを讓り合ひ
御饗宴借錢をして服も出來

◇　松並光哉

信ずればこそ偶像へ掌を合し
年賀狀百枚出せば足る暮し

◇　中見光路

友達の氣輕さいつか臥て話し
活辯の聲で通つた後は更け
鹽こんぶ鍋の合間に混返し
金だ金だと思ふ度んびに皺がふえ

◇　島田翠峯

御大典奉祝（二句）

彌榮ゐます大空の澄み渡り
孝行をするに僞りなごあらじ
去る者を追はずさびしひ日を送り
愛の巢を作るに金が要ると云ふ
秋深く質屋暖簾うごくだけ
金出せば毒婦の眉はうごくだけ

◇　水田黄彩

黄昏に鮟鱇密輸らしく積み
今掛けた額は五六歩下つて見

粒々集

渡島　神尾三休

賜饌に召されて

五體ただ忝なさにひきしまり

大連　大島濤明

鹵簿肅々

鳳輦へピカリーと陽の反射

文武百官奉行

篝火の大禮服をちと燻すべ

御即位大典

神鏡へ尊き衣冠ありありと

饗餐を賜ふ

乾杯に大食堂の椅子の音

津々浦々

茅屋に白酒黒酒の醉ひ心地

魚崎　柴谷柴舟

嬉しくて何度も見しと書いてあり

手紙ではハキ〳〵ものを云つて越し

逢つて見れば手紙の事を口にせず

金澤　安川久流美

若い時の寫眞腕を組み

貧しくも野菊一輪氣分なり

東京　富士野鞍馬

相傘は風呂屋の暖簾までのもの

柿を剝くことも秋なる氣分にて

小包が例の如くに來る師走

おとなしく待つてる横を急行車

お袋も小手をかざせば腕時計

煙突を見れば損するやうでなし

川の名を敎へてからの旅の連れ

日光にて（一句）

中禪寺これを朝霧といふならむ

御影　長崎柳秀

よし來たとボールの樣に猪口を受け

驛近くなつて圓本包まれる

置炬燵子供の足袋も暖たまり

俺が聞くわたしが聞くと電話口

交換手耳の温さを思ひ出し

一筆ですむにも會ひに行く男

をちぶれて訪なう人もなかりけり

月評（前號）

路郎　紋太　素人
山雨樓　ひろし

近作柳樽　山雨樓提出

押しのけて乘る朝々を
悔ひながら

多喜女

山雨樓＝この句を非常に面白いと思つた。慌だしい朝の通勤電車に於ける人間のさもしさをちつとふり返つて見る心持がよく表はれて居ると思ふ。又調子も大變なだらかに歌はれてゐると思ふ。

紋太＝僕も同感します。

素人＝悪い句ぢやないと思ふ。けれども何やら格言見たいな氣がする。詩的價値に乏しいと思ふ。

紋太＝僕はさう思はない大變詩的な句だと思ふ。

素人＝うまいこと言つてある。よくこなれた句だと思ふ。

紋太＝うまいこと言つてあると言ふ丈でなしに、自然に感情が溢れ出たと言ふ句ですな

素人＝僕はそれと反對にわざとらしい句だと思ふ。

紋太＝素人氏の言はれたやうに格言めいた氣持を持つよりも此句には非常に正しい心持が含まれてゐる。

素人＝電車道德とか何とか言ふ……

紋太＝それを言はうとする樣なワザとらしさが出てゐない、自然に言ひ放つてあるといふ感じがする。

素人＝僕は他の句の方があの人らしいと思ふ。

紋太＝僕は人は知りませんが此句だけで言へば正しい心持と詩的に言ひなしてあると いふ點に無暗に感心します私が若しも電車で通勤する樣な境遇でしたら、電車に乘る度に この句を口吟んでも良いといふ心持を與へられる。

素人＝悔ひるとか言ふ樣な大袈裟な問題ぢやないと思ふ。僕は自分が人を乘せて後から乘ることにしてゐるのでさう思ふのかも知れないが……。

紋太＝それはその人の立場によつてさう感じられるのでせう。

素人＝明らかにさうだとは言へないと思ふ。

路郎＝それは境遇が違ふんだと思ふね。素人君が押しのけて乘らないといふのは、ラッシュアワーに乘らないからで それで君には判らないんだ。

素人＝僕はラッシュアワーに乘りますよ。

路郎＝たとへ乘つても乘るべき切實さが無いのだ。僕は此の句は正直な告白だと思ふそれだけで紋太氏の言はれるやうないゝ氣持にはなれないが實感を正直に纒めた手腕は認めていゝと思ふ。

紋太＝僕は正直さに打たれます。

素人＝誇張した嫌ひがある。

路郎＝誇張とは取れない、こういふ生活をしてゐる人は隨分ある。相當な地位にある住友銀行の人が、朝々を迚も押し合ひで乘つて行く相だ。課長に至る迄さうなんださうだ。十時か十時半に平氣で出勤する人は別だが或る種の階級の人はさうしては生きて行けない その人達の五分でも早く行きたいといふ心持は受取れると思ふ。

素人＝乘り殘されるといふやうなことは少ないですね。
路郎＝毎日のやうにラッシュアワーに乘らないからさう思はれるんぢやないですか。
素人＝腰をかけるか腰をかけないかといふだけの違ひで乘れないといふことはないと思ひますね。
紋太＝押す押さないといふことは、電車が混んでゐるといふことだけではなしに中が空いてゐても早く乘りたいといふ氣持から入口で押すのだと思ひますな。
素人＝早く乘つて坐る場所をとらんが爲に押し合ふのではありませんか。
路郎＝さうぢやないんだ。半賃電車などでは乘れるか乘れないかゞ問題なんだ。
素人＝半賃電車に乘つたことはないが結局電車に取り殘される時は少ないと思ふ我れ勝に乘るといふことを悔ひると言ふ氣持はどうも。
路郎＝空いてゐる電車で押し合ふといふやうなことがないとすれば押し合ふといふことを悔いるといふ氣持はすると思ふね。
素人＝押し合ふのは無意識に押し合ふのであつて、その時に悔いるといふ樣な氣持はしないと思ふね。
ひろし＝私は非常に平凡な感想を何だか大袈裟に傳へて居ると思ふ。多喜女の他の句と比較するとこの句はうまく拵へて居る樣に思ふ。
山雨樓＝僕はひろし氏の言はれた平凡な所といふ點が反つて捨て難いと思ふ。突飛な目新しい物を作る爲に、所謂こさへることになり易い川柳にかうした平凡な境地をも純眞な心持から歌ふと言ふ事は詩の第一義的に尊とい事だと思ふ。

素人　提出

外は雨母唐黍を燒いて吳れ

雪峰

素人＝うまい句ではないが、單純な表現の仕方で母性愛がよく出て居ると思ふ。
ひろし＝「外は雨」と言ふ上五がこしらへ上げた樣に取付けてあるといふやうな感じがする。
素人＝この場合に「外」は必要だ雨といつた丈けで外はなくてもいいやうな外だが……この外は適切な表現だと思ふ。
路郎＝之が無かつたら、此の句は生きないと思ふ。感じの句としてはよく出て居ると思ふ。そして母親のどう言ふ人であるかゞよく出てゐる。
ひろし＝「外は雨」は隨分ある。常套的に使つてある言葉だと思ふ。
路郎＝此場合は止むを得ないと思ふ。感じの句としてはよく出てゐると思ふ。そして母性愛が浮かび出てゐる。
素人＝家庭までが忍ばれる。
紋太＝たうきびが非常に働いて居る。單純でないですな。「外は雨」で用意がよく出來てゐる。
山雨樓＝下五の「燒いて吳れ」に一寸思ひついたんですが、この場合「燒いてやり」としたらどうであるかと考へると、「燒いてやり」にすると全く事柄そのものを説明した型になつて所謂平凡になつて了ふ。「燒いて吳れ」と言つて此句が子供の立場になつて或出來事を客觀的にこうした境地をうたつてゐるのであるが、下五の手法によつて句がふつくらと生きて來て居ると思ふ。
素人＝過去の經驗を歌つたものだと思ふ。
路郎＝それはさうだ。
山雨樓＝さうすれば自分の母といふ意味でせうか。
路郎＝勿論自分の母だれ。
山雨樓＝さうだとすると上五がつきにくいと思ふ。
路郎＝句を讀めば現在の形になつてゐるが過去の追憶を現在の表現形式で詠んだ句だと思ふ。
紋太＝過去現在を言ふより出來事と作者の心持が一歩離れてこう歌つたと言ふ樣なのが本當だと思ふ。

ひろし　提出

他人らしく妻と居る日の火鉢なり

閑生

ひろし＝この句を咏まうとする作者の心の中にある寂しさがよく判る。自分が何を歌はんとするかと云ふところの氣持も非常によく出てゐる。「倦怠を將に覺ねんとする夫妻の有樣が、火鉢を圍んで妻と居る所を「他人らしく」と表現した事によつて巧みに効果を出

して居ると思ふ。

素人＝僕は、此句は非常に好きな句で印をしてあつた。「火鉢なり」と十七字にするために「なり」をつけた樣な感じがする、もつと外に飛び放れた表現の仕方はなかつたかと思ふ。

紋太＝僕もさう思ふ。「なり」が非常に弱いその爲に焦點が失はれた樣な氣がする。氣取つて居ても「かな」とする方が力があると思ふ。

ひろし＝「なり」をとつて「火鉢」で止めた方が良い。

素人＝「火鉢」を「瀬戸火鉢」とか「桐火鉢」とか言つた方がよくはないか。

ひろし＝「桐火鉢とか」「長火鉢」なんぞとしてはいけない。

素人＝成程火鉢だけの方がよいでせう。

紋太＝「なり」でいいなしたなア。

素人＝可「なり」いなしましたなア。

紋太＝心持ちは、想像出來るが、まだ完成されてゐない所が惜しい。

山雨樓＝僕も紋太さんと同意見です。まだ充分に燃燒し盡くされて居ない樣に思ふ。

路郎＝矢張り「なり」は間に合はせの「なり」の樣な氣がするね。寧ろない方が、ぴんと來る、が然し出鱈目に調子を案ずる事も考へものだから、作者は「なり」をつけたんだらうがもう少し何處か工夫がありたい。併し拙い句ではないと言ふ事は言ひ得られる。

紋　太　提　出

眞夜中のさうざうしさは
死んでゐる

紋太＝僕は多くを言はないで 内容を多分に盛る樣な句を作りたいと何時も思つてゐる。この句は死んでゐると言ふ言葉が 感じが悪い樣に思ふが、私のつまり多くを言はないで多分に内容を持つてゐる 句としてこの句に感心します、僕の思ふこの句の内容は死人のある家の夜中の光景を 思はせられるのである。「死」と言ふものが、時を撰ばないと言ふと變な輕つぽい無常觀のやうですが、兎に角さうした淋しさと表現から來る 或る特殊の味ひを感じる事が出來る。

路郎＝非常に實感に卽した句であつて、その場の光景を充分に言ひ盡してゐると思ふ。この句を讀んだ時には、紋太氏の説明と同じ境地を想像し得られるが、この作者自身の境地を僕は知つてゐるので、その方面から少しく説明したいと思ふ。

作者は目下入院患者である。他の句を見ても淋しさは面會人もへつて來てと言ふ句のある如く、長い間入院して居る人の淋しさを咏つたものであると思ふ。それだけにこう言つた句は 句の巧拙と言ふ事を超越して句境を味へばいゝのだと思ふ。と云つて全然拙くてもいゝといふ意味ではない。

紋太＝僕は僕の境遇に近い 方の意味にとりましたが、病院内に居られる人の句と承ると又一層意味は違つても 感じが深くなつて來ました。

素人＝先刻言はれた 家庭句として考へる時と 病院内の出來事として考へて居る場合と「死んでゐる」といふ言葉に多少の適不適があると思ふ。病院とすれば、「死んでゐる」の表現はそんなに露骨でもなく 誇張でもなく受取れる樣に思ふ。

紋太＝僕の前の取り方は 享樂的な川柳としての普通の味はひ方であつて、その爲に死んでゐると言ふ言葉を非難する氣が 起つたけれども、本當を言へば「死んでゐる」と言ふ言葉が何故使はれてあるかと言ふ事を、僕が若しも眞劍に考へたらもつと 作者の心持に觸れ得たかも知れない、つまり僕の味はひ方が淺薄であつた事を御詫びします。

素人＝お二人の御説で凡て 盡されてゐる樣に思ふ。併し病院に長く居られる方であつて初めて價値があると思ふ。所で隣が騷いでゐるといふ風にとつたならば 古い嫌やな句になる、だから句を鑑賞する場合に作者を或る程度迄知つておかればならない。「死」と言ふ事に感覺が鈍つてゐる者でも 病院内の樣に昨日も死に今日も死んだと言ふ所では「死んでゐる」といふ言ひ方が一層深刻味がある樣に思はれる。

ひろし＝今迄のお説を聞かずに、考へると川柳のよくやる 手法で眞夜中の森とした所へさうゞしいと言ふ取り 合はせを行つたと云ふ見方が起るけれども、その表現の仕方に於いて 何だか眞實味があるのでさうではない樣に思つたが、果して兩先生の御説のやうな句境にある事を知つた。

山雨樓＝僕もまだ十分に經りませぬが、この句の叙法に、も一つ推敲の餘地があると思ふ

と言ふのは、この作者の偶然にも二つの句が「何々はどうした」とか「淋しさはどうした」とか「さうぐしさは死んでゐる」とか言ふ命題を一つ持て來し之に極端なアイロニーを配した事は優れた手法ではあるが、夫だけに難が殘されて居ると思ふ。かうした事實に直面した場合のもう少し壓搾した心持はまだ殘されて居るかに考へられる、然しそれはこの場合偶感であるので、作者の感じた心持は、はつきりと受取る事が出來るのである。

路郎　提出

ありがたいけれど
重い薩摩芋

源坊

路郎＝何の奇もないやうだけれども、力強さを感じる句だと思ふ。

ひろし＝源坊君の句らしい、ユーモアを含んだ面白い句だと思ふ。かうしたロザとらしくない滑稽味が川柳にある事もいゝと思ふ。

紋太＝僕は今迄源坊君の句が、何故かしら始終耳に殘つてゐる その感じは所謂川柳らしい材料を非常に濃厚に取扱ふ作者だと思つて居た。そして何時も源坊君の句の何處かにさう言つた臭味を感じて居たんですが、この句はその濃厚さも如何にも川柳らしい臭味も感じない。お心安く味はへる佳い句だと思ふ。

素人＝僕はこの句から教へられる事は

ありがたいけれど重たい薩摩芋

一寸した事だが、「ありがたいけれど重たい」とはさすが上手に言つてあると思ふ。「ありがたいけれども」の「も」を抜いた所が巧者だと思ふ。「重い」に「た」をつけて重たいとした所等は重たさが感ぜられる、技巧の上で注意すべき事だと思ふ。

山雨樓＝こんな事を考へますが……、成程叙法もよく出來てゐるし、ユーモアが溢れて居ると思ふが、然しそこに純粹な感情でない換言すれば目立たないけれど、或る理智が多分に這入つて居る事を考へたいと思ふ。

素人＝この句は實感だ。

山雨樓＝實感だらうが 詩として考へた場合に……それは餘りに 穿鑿的な言葉かも知れぬが 川柳がウイットと言つたものから切り放す事が出來ない運命にあるものなら、この句として完成句だと思はれるけれど 機智を離れても尙ほ川柳の境地があり 得ると言ふ事を前提に考へるならば、この句の境地は全つて淺い皮相なものの樣に考へられる。寧ろ前の句

丸髷に結はせて見たいのと出會ひ

（この句も一寸難はあるが）……の方に心の働き方に深味を見せてゐる樣に思ふ。

ひろし＝山雨樓氏の いつもの御説の樣に純情一本槍だと、川柳の持つてゐるところの特長といふものが失はれるやうな懸念がある矢つ張りこの句のやうな ユーモアのあるものも川柳の一方面として 發達さして良いものだと思ふ。

山雨樓＝僕の言ひ方が 足りないんでせうか 僕はこの句をどこまでも否定する のではない。只僕の純情と云ひ、僞らざる感情を歌ふことが主であつて欲しいと思ふ、それのみが主張するのでなく、それが どこまでも基をなすものでなければならぬと思ふ。

路郎＝僕は凡ての詩に於て、ウイットと言ふものが、排斥されるべきものではないと思つて居る、そして凡ての句があらゆる方面の內容を包含して居るものでないと 思つて居るのである。この句は、この句の傾向として味はひたいと思ふ。この句から特種の品位だとか或は妖艶さ、凄艶さその他色々のものを味ふ事はできないけれども、或種のユーモアは感じ得られる。其點でこの句の生命があるのであつて、先刻山雨樓氏の言はれた如く或る純情によつてのみ 歌はれたものが川柳であり、そしてそれが根源をなして居る事を主張される事には、同感ではあるがこの句のやうな行き方をその意味に於て 批評する事は當らないと思ふ。 であるから他の或句より非常に優れて居ると言ふ 意味ではないのである、只近來ユーモラスな味ひが、非常に稀薄になりつゝある 川柳界にこの一句ある事を興味を以つて迎へたにすぎない。

川柳塔　紋太　提出

ゆるすべし蹂躙られて
ゆるすべし

舟々

紋太＝事件的にも何も判らないし、言葉の切れつぱしの樣であるけれど そこに或る快い力強さを感じて僕は推稱したい。その力強さが他の缺點を思はせないまでに 出て居ると思ふ。

山雨樓＝かう言ふ叙法も、その裏に確かに力強いものを持つて居ると思ふ。以前の月評會の時に松耶氏の句に

丸刈になつて世間を欺かん

といつた句があつた あの時に私は非常に感

心したのですが、作者の心持にぴつたり共鳴した場合にはとても愉快に感じさせられ易い手法である樣に思ふ。

併しこの場合上れと座五にゆるすべしが重つた事が味つて居ると少しく、緩みを覺にて來る。舟々君の或る人生觀が覗がはれて心から共鳴する、その點だけも一つゆつくり考へて見たいと思ふ。

ひろし＝ゆるすべしを二つ重れた事によつて成功してるのではないかと思ふ。キリストの「右の頰を打たれたならば左の頰をも向けよ」と言ふ、思想であつて着想としては平凡な思想の表白の樣には思ふが、かなり佳い句だと思ふ。

素人＝ゆるすべし二つを重れて居る事は、この句の長所であり、缺點であると思ふ。「ゆるすべし蹂躙られゆるすべし」ゆるして居ないのである、悟つてもゆるし得ないものが溢れて居る「ゆるすべし蹂躙られてゆるすべし」悟りきつた人ぢやなく悟り切れない藻掻きと悶が二つ重つてかなり出て居る、缺點はやゝ技巧に捉はれて居ゝ樣な感じがせんでもないと思ふが惡くない句だと思ふ。

ひろし＝うまい事を言はれましたね。二人で言はれた後へ――

路郎＝うまい句には違ひないが、今素人氏の御說の如く、ゆるすべしを二つ重れた事は長所と缺点とを一緒に出して居る事は確かである。慾を言へば、「ゆるすべし」を他の言葉を持つて惱みとか いろんなその他の境地を出せばもつと優れた句になりはしないかと思ふ。

若しこの句を非難する人があれば、餘りに大まかに言ひ放つて居ると言ふ事が出來るから。

素人提出

諦らめる底に つかへるものがあり

琴人

素人＝丁度前にあゝ言ふ句が出たので よく似た句だと思ふので出して見た。「思想的にですな人間の弱さとか、或は執着とか言ふものをかなり痛切に歌つて居ると思ふ。けれど前の舟々君の句に比べると 技巧が單純な樣に思はれる。

紋太＝僕は かう言ふ表現を見ると作者と句の間に隙があると直ぐ思ふ、客觀体の句でも勿論さうではあるが、主觀的な句は一層作者と、ぴつたりと添ふて居ない事には不成功だらうと思ふ。

ひろし＝「ものがあり」の「あり」が作者と句の間の溝をなして居るのではないかと 思ふ その爲に「諦らめる底につかへて居る」氣持をよそ〳〵しくしたのではないかと思ふ。

紋太＝心持はよくわかりますな。

素人＝佳い句ではないですね。

路郎＝「ものがあり」と云つた爲めに非常に句を說明的にして了つたことが、この句の印象を弱めたんだと思ふ。そしてかう言つた境地を詠んだ句は從來にもあるので、それを如何に表現するかと言ふ事が、作者を生かす一つの方法である 、餘りに單純に餘りに說明的な叙法に陷つて居る爲に 第三者にそれ程の感銘を與へずに終つた句であると思ふ。

紋太＝この思想を 表現するには少し叙法が溫和しすぎると思ふ。琴人君は溫和しい人ですか。

一同＝えゝさうです。

紋太＝氣の弱い溫和しい人ですな この句でさう言ふことが出來ると思ふ。

素人＝不平の塊んぢつと抱いて居る男です。

紋太＝「まんぢゆさげ」の句は非常にいゝと思ふ。

素人＝あの句は實感の句です。

路郎＝あの句は佳い、自然に何か出て居る。

素人＝「まんぢゆさげ」にしたらよかつた「願ひさげ」にしようか。

山雨樓＝僕は路郎さんと同感です。之に就いても（矢張り句の仕立て方と言ひますか 以前「川柳人」なんかに大變興味を持つて投句した時の事を思ふんですが、それは「川柳人」と言ふ雜誌に載せられたから、それが直ちに句主の格調を劔花坊が期待する 句主の心の革新であると言へない 場合がある事を考へるのである。と言ふのは一寸想起した句で

血塗ろになつて心臟うれしさう

を掲載された事があるが、さう言つた自分の心境は只歡喜に溢れたと言ふ 狀態を或る特種な歌ひ方によつて表はさうとした 考へがその場合多分に占めて居つたので、心から歡喜そのものを叫ばうと言つた 氣分はどちらかと言へば從であつた、と言ふことは自己を僞ると迄は思はないが、革新と言ふ目新しさに、思はずさうした新しい技巧の方面に走つて居た事を今にして思ふのである。この句にしても、かう言つた心境は眞面目な思索として、又深い瞑想として受取る事は出來るが「底につかへる」と言つた一つの發見に引きずられて、そこに又興味を覺ゑると言つた樣な傾向が若しありとすれば、ふりかへつて見なければならぬ事だと思ふ。要するに自己を見詰める目も、その切實な表はれでなければならぬと思ふ。（氣旣革郎記）

松茸の句なき記

南海沿線鳥取の莊に於て

安井ひろし

秋も酣になると松茸狩を思ふ、松茸狩といふと例年本社の鳥取の莊茸狩行を思ひ出す。本年は季候の加減でよほど遲れて、十月廿八日の日曜日に、松茸狩が行はれた。例によつて南海電車の太田朝陽氏と橋本大藏大臣の斡旋に負ふところが多い。

何分我まゝ者のお揃ひとて幹事も大抵ではない。山が低いといふので――低いと見晴しがないこと勿論で――わざ〳〵テントもない山の頂上を選んで勝手に陣を布く。山番の世話方面くらつて、わつさ〳〵と水を荷ふてくる。焜爐を運び、鍋を運ぶそのため數丁の勞を煩はしたが、それでも例年の川柳の人々だといふので笑顔で迎へてくれたのは愉快であつた。

一同が選りによつた格好の場所とて、一帶の風景得も云はれず、淡路の島山は模糊と霞んで三宅克巳の水彩畫を見るようである。

やがて我ら畫中の人となつて一同松茸谷にをりると、あるは〳〵うんざりする程の松茸ぜめに、子供、婦人連の嬉しそうな歡聲があがる。

やがて用意の『かしわ』のすき燒がはじまる、けふは奥樣お子達携帶の家族的行樂として兵站部の方はおまかせきりで、一同飲むは〳〵やがてかほる氏、萬よし氏の珍藝が始まり支那服の素人氏の支那奇術はもつとも傑作だつた。

路郎主幹は病氣も忘れ幾杯かの微燻を含みて上々機嫌であつた。二柳子君や私は酒を飲まぬので子供等と共に天眞爛漫にぱくつく。その内に山とあつた松茸が足りないといふので私は子供連と第二回の採集に出かけうんと松茸を運んでくる。

かくて十二分の興を盡し川柳の法悦境に沒頭して、かへつて句を作らず四時すぎ山を降るともう日沒近く、無事難波驛に歸着したのは七時頃であつた。參會者は

路郎主幹、純子嬢、萬よし、敏子嬢、二柳子、同夫人、靜江嬢、朝陽、素人武子夫人、熊谷氏、同夫人、お子達三人、かほる、亂耽、加香、花子嬢、岩田諸氏と小生の多數であつた。

路郎氏を繞ぐる人々

大連　佐々木三福

先輩久々に歸省したので渾沌たる日本川柳界に民衆的團體と言はんか、兎に角關西柳壇に一大勢力を持ち今に何事かを仕出かすであろふとの或る期待を持たれてゐる麻生路郎氏を主幹とする川柳雜誌社の人々に偶然の機會で會ふ事が出來た。その内最も印象の深かつた三柳人記を書く。

庄萬よし氏

灘の菰かぶり、上戸黨の飲み意地を際限無く啖る香の立こむ内に肩巾の廣い、骨組のがつしりとした中年らしいこの屋のあるじ、野球を談じ芝居を語り、勞働問題に芥川論に行くこころ可ならざるなき快氣焰、客と共に飲み客と共に味はふと言ふのが万よし氏であつた、川柳雜誌を通じて見てゐた氏の性格は所謂通人肌であつて一方哲學に宗教に多分の理解を持つた人と見てゐたが會つて見てこの自分の想像がぴつたりと當つてゐたのは嬉しかつた、上戸によく下戸ともよく、時に自らチームを作つてボックスに立ち立派に三振して苦笑する稚氣さゑ持つ甚だ當りの軟かい人であつた。

氏の川柳傾向、氏は確かに同社多くの同人とは多分に異るものを持つてゐる、主幹麻生氏は今川柳に對して大なる問題にぶつかつてゐるのでは無いかと想像される節があるが萬よし氏は路郎氏よりも更に露骨に大きい惱みを持つて内的にこれが解決について今爭鬪をつゞけ精進してゐるものと見る、氏の近詠

合掌に矛盾を氣づく日もありて
圓周を走りつゞけてどこに行く
魂に研ぎのかゝらぬ一とこころ

は私の觀察を如實に裏書するものであらふ、川柳雜誌社は色々な意味に於て働き手を持つてゐる内にも川柳を以て社會へ呼びかける運動を起してゐる路郎氏が氏を擁する事は如何にも心強い事であらふ

三好革郎氏

三好革郎!!何んと言ふ齒切れのよいサウンドを私達の耳に迄傳へる事であらう、名は體を現はすとか、氏に酒精分を一コンマ五丈け加へれば更に氏は躍動する、

少しく卷き舌となる、矢でも鐵砲でも持つて來いと拳固で胸をドンとたゝいて見せるあたりは更に〳〵たのもしさを感ぜしめずには置かぬ、それ丈け氏は鬪志に燃えてゐるのである、麻生氏に紹介された一挿話をこゝで述べれば完全に革郎氏をゑがき出す事が出來るであらう、時は大正十二年彼の關東大震災の當日、阪神の各新聞社が先を爭つて東都災害の詳報を手にせんと腦漿を絞つた時革郎氏は大毎社の若き記者をしてゐたが覇氣滿々たる氏は川柳的氣轉と大膽さを以て辯舌を振ひうま〳〵と軍用飛行機に便乘して東京に入り、逸早く正確なる詳報を傳へた功に依つて千金の賞を得、爾來重用されてゐたさうだが、今は其大新聞社も自らおん出て何の未練も無い所に氏の面目の躍如たるものがある。

氏の川柳的傾向、純然たる川柳雜誌社調である、そして其内に氏自身の片京がうかがはれる、川柳雜誌社調とは即ち路郎調であつて同じ關八派の内にあつても番傘調の如く魚の膓式何等手にさはるものゝ無い川柳とは稍々趣を異にするものである、左に氏の創作から二三ぬいて見よう。

逆さまに切手を貼るも意地と知れ
奇蹟でも待つ氣持にもなりまする
グレシャムの法則が餘りのさばり

川柳雜誌社は鬪將革郎氏を前門に据へ、萬よし氏を中門に配し、ひろし氏をして後門の備へとする戰法を取つてゐる。

安井ひろし氏

若いやうで老けて見ゐ、老けたるが如くして若いのが、ひろし氏である、世間には進む事だけ知つて守る事を知らない、事業家の失敗した適例が多々あるが茲に氣の附いた川柳雜誌社は不言實行、いつも默々として社務に勞力を惜まぬひろし氏を選んで内務方面に配してゐるのは賢明な遣り方である民政黨の安達氏にも比すべき氏はしみじみと雜誌經營の苦心談を語つた、然りよく進む人は得易いがよく治むる人は容易に得られぬものである。

氏の川柳には温順なる氏の個性が現はれ、そして川柳雜誌社の調格にはまつてゐる

醉ふて戻ればお茶屋から歳暮
重い空氣將棋は敗けになりにけり
まつすぐに歸ればお茶も沸いてをり

私は試みに新興的空氣の稀薄な大阪の柳壇に於て思ひ切つて川柳雜誌社が駒を陣頭に進めては如何との問を放つて見ると氏としては詩派の川柳に相當の理解を持つてゐる事を語つた、近き將來に新傾向川柳運動が關西方面に喰ひ入る日があればその第一の地盤は先づ川柳雜誌社の人々の内に見出す事であろふ。

御大典奉祝句會

日時　十二月八日午後六時
會場　四宮神社々務所（神戸市電山手五丁目下車北へ半丁）
兼題　「提灯」　三句　紋太選
會費　五十錢（茶菓を呈す）
主催　**川柳雜誌社神戸支部**

川柳を撫でる

―月評餘談―

岩本素人

◇月評會はこれまではヅーッと不朽洞でやつてゐたのであるが、神戸から態々來て頂く紋太はんや、八尾から來られる山雨楼さんやの爲に岸の里の不朽洞ではあまり遠くて、お氣の毒なので、どこか大阪の市内で適當な場所をと物色中であつたのを、先月からひろし君の參加を見る樣に成つたのを機會に、同君の好意で安井邸を借用する事にした。岸の里の頃は歸りには必ず万よしへ寄つて管を捲く事を一つの樂しみとしてゐたのが、安堂寺橋のひろし居では道順が違ふので万よしを驚かす事が出來なくなつたのは聊かものたりないが、ひろし居は月評會場として小ぢんまりとした、市内には珍らしい落ち付いた親しみのある相應しい會場である。

◇いつも月評會毎に思ふ事であるが遠い所やお忙がしい中を都合して參加して頂く評者諸君の御熱心と御厚意と共に私共の感謝しなくてはならないのは、毎會筆記をやつて頂く革郎、亂耽兩君の努力である。私には筆記と云ふものゝ經驗はないが、餘り面白くない仕事であらうと思はれる。耳と手と頭に少しの隙をも與へない實に張り詰めた氣持ちでなくてはならないにも係はらず、そこには創作的法悦か伴はない。おまけに評者の方では熱心して來ると筆記なんかにおかまいなく早口で饒舌り捲くる。筆記者こそ迷惑至極であらう。革郎君は新聞記者中でも聞こた傑物である。彼の關東震災には大阪から飛行機で帝都への一番乘をして第一番にあの慘狀を我々に報じて呉れたのは誰あらう卽ち我が革郎君である。革郎君は信々の人である、革郎君の全身は意氣其ものゝ結晶である。革郎君のこの意氣力が雜誌の仕事にも働いて、編輯に校正に筆記にと言ふ風に不斷の努力を拂つて貰つてゐる事は藏相二柳子君と共に我が社の爲に誠に人材を得たものである。亂耽君は川柳雜誌社同人中の最年少者である君は實に熱心なセンリウニストであつて驚くべき叡智を藏する所の詩人である事はその川柳を見ても肯く事が出來よう。

此の熱心が、川柳の爲とし言へば、このいやな面白くもない月評の筆記をさへ自ら進んで引受けて呉れたのである。恐らく他の筆記なら拒絶された事であらうと思ふ。亂耽君は目下大阪商大高商部に在學中の學生さんで筆記はお手のものである。

◇神戸柳界の巨人紋太はんが、ひろし居の敗の乾の隅に陣取つて居られる。懐から静かに眼鏡を取り出して雑誌を見て、それが濟むと叮嚀に眼鏡をサックに入れて、あの圓滿具足の顔に笑を含みながら『私は此の句に就て』と徐々として論じ始められる所は、その儘が藝術品である。この紋太はんと十月の月評會の歸りを色々お話しを聞きながら歩いて居た。其時に斯んな意味のお話を聞いた。

『私は(紋太氏)は川柳の他に何の趣味も道樂もありません、全く私は川柳を作りに此世の中へ生れ出たのだと信じます』と。僕は全くごつんと參つてしまつた。話は簡單だが、何と言ふ強い言葉であらう。すべからく藝術に携はるものには此の斷乎たる信念を持ちたいものだと思つた。句を巧くなりたいと思ふ前に、自分の生命の中の如何なる位置に川柳を据へるかと言ふ事から極めてかゝらなくてはならないと言ふ事を教へられた。『川柳の爲に生れた』とは生命即川柳である。何と素晴らしい信念ではないか。

お父さんはやはり川柳々々と云つてる

よ　路郎

◇朝飯を食つた儘でまだ晝も晩も喰べてゐない、と言つて山雨樓さんは忙がしい勤めから家へも歸らずに出席される、皆に叮寧に挨拶をして、謹直其ものゝ樣にカチンと箱を置いた樣に座に着かれる。鞄を引寄せられる此中には豫め月評會の爲に用意された參考書が數冊這入つてゐるらしい。その中から川柳雜誌を一部抜き出して鉛筆を取り出される。問題の句のページを開けて、その句の周圍を叮寧に鉛筆の線で圍ひ完全に他の句から隔離される。そして餅をちぎる樣にボツリボツリと『下五が』とか『なりと止めた所が』とかと言ふ風に論じ始めると、その下五なら下五の所へ又圍ひを描かれる『氣持は受取れるが……』とか何とか言ひながら、今度は其部分丈け句の上々鉛筆で塗りつぶし始められる。其句に就ての皆の評の終つた頃には完全に其句は跡型もなく鉛筆で黑々と塗りぶされて仕舞つて居る。尤もこんな事は山雨樓さんは意識してやつて居られるのではないのであらう。只眼丈けで句を見て評をしてゐるのでは物足りない。つまり熱心な結果が鉛筆に傳はつて、其句の上を撫でなくてはならなくなるのであらうと思ふ。心内にあれば色外に表はるで、山雨樓さんは殊にさうであるらしい。氏の句と言ひ態度と言ひ言葉つきと言ひ、そのからだ付と言ひ、文章體と言ひ總てが所謂山雨樓式統一を保つてゐる。

◇あまりくだらない事を書き過ぎたが、年忘れのつもりで讀んでください。

—御即位大典の朝—

一路集

（募集句）

臺所

一點句

臺所を日那が覗くいやな事　方可
臺所女中の留守を猫がなき　杉々
菊正の樽が目に立つ臺所　菊路
火の用心忘れたやうに貼られて居　たけし
お料理のそばに小さく猫が居る　ワン公
勝手から訪ね恩師に叱られる　白眼子
臺所空蟹行儀よくならび　萬古
上敷をしいて臺所膳が出る　同
新世帶這入れればそこが臺所　雪峰
靴音も知らず急いでる臺所　千鳥
魚屋へ臺所からものを言ひ　吉五郎
流し元しつこい鷄へ杓が鳴り　黄彩
摺子木の掛け塲所もある臺所　雨月
臺所たゞしん〳〵と鼠出る　松月
臺所電話番號貼られてる　花蝶
御夫婦の部屋へ食事のベルを押し　同
臺所鼠の音に行つて見る　悟空
所今日は嫌いな物があり　同

椙元紋太選

臺所の狹いが妻の氣に入らず　英賀夫
午睡する間を乾いてた臺所　太閤
廣々と光つた寺の臺所　潮多浪
臺所後はまだかとせかれてる　穂波子
臺所其の日其の日の妻の腕　同
隙のない氣に臺所光つて居　黑天子
直ぐ歸る臺所何か煮へて居り　糖醉
臺所女中同士は生地を出し　新一郎
癇高い聲が指圖の臺所　鐵菴
臺所見馴れぬ猫にぎよつとする　新水
臺所器用に動く母の箸　丸葉
來客に妻臺所へ消へて行き　鮎美
臺所昨夜の鉢と錢を置き　柳秀
臺所を下女に委して長く病み　同
臺所母は短氣な聲を出し　重陽子
臺所妻に屆かぬ棚もあり　琴人
臺所で歸國はいやと拗ねてゐる　卯生
臺所へまだかと言ふて叱られる　東狂子
臺所鼠たゞ〳〵生きてゐる

川柳家の戸籍調べ索引

多大の好評の内に二百十三人の川柳家を調査して一先づ終局をつけた戸籍調べの雅號による索引をつくりました。句をみて作者を知らうとするとき、この索引によつて、作者の個性なり趣味なり居所、年齢等を知る事が出來るのは興味ある事と存じます。

索引の順序はアルフアベット順です。上の算用數字は戸籍調べの番號、下の數字は川柳雜誌の號數です「號數は一號よりの通卷で毎號の裏表紙に記してあります。」即ち路郎主幹なれば

J の部

2　路郎　一五

とありますから本誌第十五號（二卷四號）を手にとれば判るわけです（ひろし生）

A

23　啞人　一九　94　青葉冠　三一
102　鮎美　三三

B

3　凡平　一五　41　文錢　三
68　馬行　三六　85　聞路　二九
123　番翁　四七　140　文絲　四〇
154　美江　四三　183　文久　四四
198　伴内　三六

C

36　長人　三　56　朝陽一聲　二四

味の素ばかり賴つて臺所　同　桂枝
榮轉に臺所まで廣くなり　同　伴内
臺所兄嫁少し威張るなり　同　忠八
母の留守玉葱一つあるばかり　伴内　盧白
臺所亭主硯に水を入れ　忠八　湖山
臺所餘つ程いける口らしい　盧白　南窓
夫とは別な苦勞の臺所　湖山　一舟
臺所へ八百屋首だけ覗いて見　南窓　波紋
臺所猫の尾を踏む忙しさ　一舟　光路
嗅き分けて猫が泣いてる臺所　波紋　孤舟
御用聞き輕う手をかす臺所　光路　突支坊
お目見得にさても汚い臺所　孤舟　可樂
笑はして買はして夫んだ臺所　突支坊　柳笑
臺所まで御家風が吹いて來る　可樂
臺所今日は女中の公休日　柳笑

二點句

ふと妻の手際のぞいた臺所　松水
松茸のいゝ匂ひする臺所　菊路

藥局

藥局の窓につかへる合嗽瓶　松水
藥局を覗けば戀愛至上論　同
お手元で何ふにもから醫者を呼び　たしろ
藥局は聲の好いのを一寸覗き　方可
藥局はいつも冷たい音を立て　同
藥局にあきらめてゐる丙午　菊路
藥局の藥の色も賴母しく　たけし
藥局は機械のやうに瓶を出し　同
藥局を笑はせないて醫長出る　白眼子
藥局はそんな藥をそつと出し　萬古
急用へ瞬くうちにお茶が沸き　千鳥
臺所エプロンに妻少し良く　たけし
男手に子をあやす日の臺所　佳水
眞つさらなかまご嬉しい臺所　松月
臺所夜なべの影が太く搖れ　陽喜亭
臺所虫間違へて鳴いてゐる　鮎美
臺所の乳母は捨ふにかゝつて居　柳秀
ひもじさがつい臺所をのぞかで　吐句坊
臺所で借りるマッチに日短く　銀水
臺所を大概にして針仕事　菊三
臺所へまで押賣が這入ろとし　同
臺所八百屋をなぶる暇があり　孤舟
臺所母が焚いてる火のあかさ　太路
レシーバー臺所まで延ばすこと　風鈴
(人)臺所今あれがでけこれがでけ　風鈴
(地)忙しさは臺所から子をあやし　かい痴
(天)臺所へ父が呼ばれる客の膳　伴内

佐々木三福選

藥局の控口きく人が出來　佳水
ちと甘いのをと藥局ねだられる　雨月
藥局の中に看護婦よく太り　黄彩
藥局に近く醫院の門搆に　正吉改悟空
藥局はチョイ〳〵〳〵と三日分　豆秋
藥局につんとしたのも一人ゐる　市公
藥局は行進曲で匙をとり　太閤
藥局の劇毒藥を怖く見る　穂波子
藥局のあつけなく窓閉める音　素萌
藥局の窓に四角な顔が見へ　黑天子

---

88 千代二 三〇 147 町二 四
156 椿薫 四三 207 忠八 五八

D

95 隨帖 三六 106 濁水 三三
128 大夢子 三八

E

5 映絲 一六 170 燕柳 五一

F

104 楓林 三三 150 普天 四一
180 二葉 五三

G

10 愚劣 一七 17 元山 一八
118 悟郎 一八 21 五葉 一九
34 義矢蒲 三 54 雅國 二四
57 五呂八 三五 69 銀波樓 三七
126 五花村 三六 127 五健 三八
177 銀砂子 五三 189 吟女 五五

H

12 波郎 一七 32 半文錢 二
66 飯山 二六 78 屏三呂 二八
89 博久 三〇 96 ひで一 三一
115 白鷗 三五 125 ひろし 三七
135 半疊 三九 144 穂波 四一
145 白蝶 四一 178 八翠坊 五三
184 俵兵衛 五四 204 白眼子 五七

I

37 一路 三 42 一閑子 三
48 一休 三三 84 一狂 三九
87 一二森田 三〇 120 一文字 三六

藥局で責任のある匙動き　陽喜亭
藥局は金を拂ふとぴしやり閉め　かい痴
猫いらず買へば藥局あぶながり　東狂子
藥局へ奥さんの立つ開業醫　琴人
藥局に明るく置かれたダリヤ　菱明
計畫も空し藥の瓶提げて　同
藥劑師きれいに分けた首を出し　東狂子
藥局は言葉少なく瓶を出し　同
藥局で念を押してる水藥　伴内
分量を聞けば藥局首を出し　忠八
藥局へ元氣な聲は藥取り　ゴム
投藥の口から低い鼻を見せ　虚白
調劑に小さく女手を運び　耕民
劇藥の冷たく光る藥棚　湖山
藥局のワインはいつの間にか減り　鯉友
藥局で慢性病が話し込み　銀水
藥局へ迄は歩けるやうになり　一笑
藥局でウエートレス何か買ひ　菊三
男性を論じ藥局伸夫と揉め　梢雨
藥局の鹿つめらしい顔で盛り　恒子
藥局の片手笔もつ趣味もあり　光路
藥局の前に見舞の世辭と世辭　可樂
藥局にちと手間の要る客が來る　柳笑

佳吟

藥局の暇は匙なごもて遊び　幸泉
處方箋安い藥だなと思ひ　太閤
藥局は一振り振つてから渡し　一風
流感と言ふ藥局の儲け口　孤舟
藥局で南京虫の腕を見せ　突支坊
まゝごとのやうに藥局盛り上げ　波太路
醫院とは別に藥局太ること　光路
藥局へ喰べたい事も聽いてゐる　松水
皆迄は言はさずに盛る藥劑師　豆秋
藥局と心易いは永く病み　新水
訊く丈を聞いて藥局後ろむき　陽喜亭
(人)藥局のアルファベットに水もらす　銀水
(地)十人は藥に死ぬると匙を見せ　柳秀
(天)毒藥へ流石に錠の下ろされて　鐵州

選後に……

久々に多數の柳友の詠草を拜見して其熱心振りには感心したが大體に句に深みのあるものが甚だ少なく關四調の缺點とも謂はんか甚多くが單なる名詞の説明や平凡なる藥局の一場面をありのまゝに十七字に纏めた丈のものが多かつたこの遠因は出題が藥局と言ふやうな初進の人が兎角説明に陷り易いものを課題とされた事にも依ると思はれるが今後の川柳には是非深みが無くては駄目と言ふ位の信念を持つて作句に臨まれん事を希望する。

(軸)藥局に滿を持したる瓶の數　三福

167 一輸 五二
2 路郎 一五
208 壽山 五六
J
19 十字路 一八
K
8 久流美 一七
220 久良岐 一九
28 乾坤 三〇
35 佳鳴 三一
39 花童子 三三
44 劍花坊 三三
51 可明 三四
63 蚊象 三六
90 小阿彌 三〇
93 虹衣 三一
99 角繻坊 三三
107 寛汀 三四
119 草郎 三六
134 袈裟雄 三九
138 鞍馬 四〇
157 花蝶 四三
165 琴人 四〇
174 加香 三三
179 京郎 三三
190 欣女 三五
197 京二 三六
200 花情 三六
213 塊人 三六
M
9 溪花坊 一七
25 句三昧 一九
33 かほる 三一
38 花菱 三三
43 古城山 三三
46 輝翠 三三
53 京之助 三四
62 駒人 三〇
98 憲翠 三一
101 郊村乃ン糸坊 三三
112 荷十 三五
129 鎌月 三八
136 耕水 三九
155 琴月 四三
158 錦水金鐵子 四四
168 杏三 三一
176 黄彩 三三
186 休歩 三四
193 可宵 三四
199 虚白 三六
206 孤舟 三〇六

暖爐

○　銀砂子選

暖爐もう馴染の顔を寄せてゐる　風鈴
ストーブを遠ざかつてる女事務　菊路
ストーブを早出の顔が圍んでる　同
ストーブへ一杯入れて讀み續け　たけし
ストーブをまるう圍んで風を聞き　同
暖爐もう消にて宿直だけ　殘り　幸泉
暖爐とは遠く受付だけ忙し　高峰
誰か立つ電話暖爐へしきり鳴る　同
二年兵暖爐をかこみたこをつり　佳水
肩越しにストーブの火へ寒く立ち　黄彩
その秘密ストーブ少し鳴つたきり　同
二次會ときめて暖爐をさっと立ち　豆秋
回章を暖爐の前で讀み上げる　同
出勤の課長へ暖爐赤く燃に　新水
重役の顔に暖爐の輪がくづれ　柳秀
青い酒ストーブあつてよくまもり　萬手青
踊りたい靴ストーブへ動いてゐ　琴人
熱情を押に切れないストーブでし　同
ストーブも冷に切つた朝の驛へ降り　同
雜談は暖爐をめぐる丈の人　鐵洲
南國の鉢ストーブへ置き變へる　湖山
ストーブの火はぼゝゝと汽車を待ち　銀水
燃に上るまでは丁稚の暖爐なり　光路
無雜作に課長暖爐へ割つていり　同
ストーブへ今日の噂を持つてくゑ　孤舟
暫くはストーブ燃にる音ばかり　同

宮本銀砂子
庄萬よし　共選

○　萬よし選

暖爐と雪

ストーブで降るなら降雪を聞き　露次
ストーブの窓に連峰皆皚し　桂枝
ストーブに北越線の雪の沙汰　同
ストーブを圍み吹雪を硝子越し　一風

暖爐と寒さ

ストーブを圍う圍んで風を聞き　たけし
肩越しにストーブの火へ寒く立ち　黄彩
ストーブをぢつと眺めて寒い朝　潮多浪
ストーブも冷に切つた朝の驛へ下り　琴人
(佳　暖爐の火寒さを色に見せて燃え　湖山
オ、寒い寒いとストーブ拜んでゐ　吐句坊

長上と暖爐

父親が來ると暖爐は話題換へ　風鈴
暖爐焚く用が給仕に殖へて來る　新次

---

1 紋太 一五
60 光太樓 二五
700 夢遊 二七

103 百樹 三三
1331 三四 三九
1443 ○丸 四一
1660 益男 四四
1775 紋十郎 五三

4 N
14 日車 二六
149 二南 四三

R
13 柳人 二八
64 芦穂 二六
180 柳路 二八
124 利劍坊 二七
1773 柳一路 三三
202 亂耽 五七

49 萬よし 二三
61 眠聲 二五
75 美の作 二八
117 眼隱子 二六
1417 光路 四〇
1589 百々郎 四四
1672 迷亭 五三
187 まゝす女 五五

24 二柳子 一九
211 成美 五八

45 冷刀
74 龍二 二七
1310 露斗 三〇
1381 力好 三九
210 雷相 五三
樂鳥 五八

11 松郎 一七
26 水府 二〇
29 春魚春三 二〇
47 子行 二三
55 石竹案山子
59 双柳 二五
72 山月 二七
79 靜雲 二八
86 微松雨 二九
97 秀花坊 三一
108 左馬 三四

S
22 省二 三
27 志貴南 二〇
301 史風 二〇
50 春雨 二四
58 幸男 二五
71 しげる 二七
76 紫明 二八
83 助六 二九
105 山雨樓 三一
110 彩霞 三四

遺憾なく暖爐の燃ゆる社長室　柳秀
重役の顔に暖爐の輪がくづれ　同
先生の咳ストーブの輪がくづれ　伴内
ストーブを離れ新兵銃を拭き　盧白
ストーブの傍で社長も無駄話し　樂天
傭人の席から暖爐見ゐるだけ　鐵洲
暖爐には遠く受付だけ忙し　高峰
ストーブのつかぬに主任らしい音　佳水
(佳)ストーブへ御印貰ひに罷り出で　豆秋
階級をハッキリ暖爐室があり　風流子
(佳)燃ゐ上るまでは丁稚の暖爐なり　光路
無雜作に課長暖爐へ割つて入り　同

暖爐の談話

親方日の丸だと暖爐の赤い事　波紋
民政が何うの斯うのと爐にあたり　梢雨
待合の暖爐で車夫はよく喋り　ワン公
(佳)冷へ切つた暖爐で話す深い仲　青水
雜談は暖爐をめぐるだけの人　鐵洲
ストーブの話題はいつも決つてる　南窓

暖爐と團欒

暖爐もう馴染の顔を寄せてゐる　風鈴
ストーブを早出の顔が圍んでる　菊治
ストーブを寄せたかつてっき合ひ　市公
初對面ストーブの火が熱つすぎる　豆秋
ストーブは皆賣店へ尻を向け　ゆづらん
暖爐圍んで禮拜までは騷しい　茅茶亭
車座の中に暖爐の湯がたぎり　新水
ストーブへ今の噂を持つて來る　孤舟
風邪心地言ふて暖爐へまた一人　光路

暖爐の靜けさ

ストーブを焚く寢臺は窓近く　青水
暖爐室ドアーは輕い音で閉め　風流子
誓くはストーブ燃ゆる音ばかり　孤舟
物言はぬ夜を暖める暖爐にて　松水
(佳)燃ゐ絶えた暖爐へ善後策　高峰
若人のハートのやうにストーブの燃ゆ　恒子
瓦斯暖爐焚いて中風の病みっけ　雪峯
ストーブへ一杯入れて讀み續け　たけし
(佳)靜けさへ暖爐びり〳〵鳴かれば　同
白壁へ暖爐の影は伸びてゐる　幸泉

暖爐と女

ストーブへ手だけ割込む女の子　伴内
娘氣は暖爐を離れ目を落し　陽氣亭
(佳)ストーブへ女給の方が脚を上げ　柳秀
(佳)テキ一丁女給暖爐をくゞる　菊治
發車して子守暖爐に殘つてゐ　豆秋

| | | |

暖爐と個人

(佳)襁褓干す暖爐へ亭主諦める　白眼子
應接の暖爐火の種運ぶなり　幸泉
退社ベル暖爐へ水を撒いて置き　雨月
ストーブを鼻の詰つた氣で離れ　黄彩
(佳)ストーブへ齒が痛らしい指を當て　松月
(佳)ストーブへ未練着てから又あた　鐵庵
圓本の表紙暖爐にそり返り　新水
爐を圍みマッチで耳をほぢつてる　萬年青
押出しのかまへ暖爐へ一寸立ち　東狂子
賣物と書いた暖爐を屆けて來　銀水
留守事の餅が暖爐に型をとめ　一舟
(佳)見積りは暖爐を脊に首を振り　菊治
二階から暖爐じやないかと嗅みで　義夫
ストーブへ悠然と來る煙草の輪　柳笑
(佳)脱がれた齒者はストーブ掻き立てる　突支坊
スリッパの派手が目につ暖爐の火　琴人
(佳)踊りたい靴ストーブへ動みて　同
南國の鉢ストーブへ置きかへる　湖山
二三人ぢかしてストーブ火をせ　伴内
ストーブの設備に父を會得させ　一風
ストーブで吸穀落す太い腕　ゴム

選後に

拔句七十五章、內佳作十三章、取材範圍を八部門に大分して見たのは、投句諸君修辭法の參考に供せんためにて他意あるにあらず「暖爐と個人」の部に佳吟の多いのは魂のある人物がそれ〳〵に躍動してゐるからである。

十月十三日夜

特價提供

期間　十二月一日ヨリ一月十五日迄

毛紙羅丹其他

正價ヨリ五分引

和正堂

大阪市東區安土町二丁目

電振　本店　一九〇六番

電話　阪本　一七五番

冬の御用品

あれしらず

御代乃花（みよのはな）

本舗　伊藤大一堂

發賣　高橋盛大堂

到る所の藥店化粧品店に販賣す

大磯吟行

下田美智坊

十月三日前夜來の暴風雨には幾分明日の豫定も潰されて、ぐにやりとしてゐたが明けて明治節の今日となつて見れば案ずるより生むが安しで天氣晴朗ときた。いや柳子の面々相好を崩して喜ぶこと喜ぶこと、駒人の好々爺振りを筆頭に娯鹿、香川と私、それから遲ればせに城月がやつてくる。

一同すつかりはしやいで、とんとんと驛の階段を渡つて折からの九時五十二分の列車に乘り込む、幸ひ混んで居ないので一固まりに腰かけるともう話題が飛び出して『どこゐで城月さんの月評が出てゐますね』と駒人が十一月號を擴ける、とやこうするうちにもう一區間で大磯に降りる。香川氏がちよいとしやれた背廣姿で吾れ／＼を案内して塀で圍つた何れも半ブルの下町を過ぎて虎御石の跡に出る。云ふところの虎御石は小さな土藏の中に保管されてゐて相憎くこの鍵をあづかつた寺男が留守だといふので扉の金網から覗いた。

これは昔工藤祐經の家來が當時大磯に居をかまへた曾我兄弟の庵を襲つて十郎を槍で突こうとしたとき虎御前の持つて居たといふこの石がその槍を受けて十郎を助けたのだといふ香川氏の說明に何れも慨無量となる。

槍傷に昔を偲ぶ虎御石　城月

十郎を見捨てぬ神の虎御石　美智坊

虎御石十郎よりも生きのこり　同

商業地の平塚に引換へて別莊地らしいゆつたりした街道を急がぬ足ごりでぶらり／＼と三々伍々といふ格好である。折柄やつて來るであらうと云ふ横濱貿易新聞社のマラソンで市内の小兒達は紙旗を振つて待つてゐる。軈て一行は西行が『心なき身にも哀れはしられけり鴫立澤の秋の夕暮』と詠んでしばらくはこゝの庵に身を落ちつかせたといふ鴫立澤にくる。

古風な陰鬱が老松の影にひそんで昔ながらの面影をとゞめて幾つもの詠をきざんだ碑の立ちならんだ今に住む俳人の庭

園に入る。老松しよう〳〵として聲あり海のさゞめきもすぐ間近にきこゆる。

鳴立澤訪へば俳句の本があり　駒人　娛鹿

老松の庵が籐椅子出して居り　佛は庵が語る茅の屋根　城月　美智坊

鳴立澤つくね者こいふ姿なり　城月　美智坊

しばらくは一行俳味たつぷりな庭に落葉踏み〳〵庵の中なぞうかゞつて足を休める。

たゝずめば落葉に波の音ばかり　城月

藁屋根も並べて開けぬ別荘地　娛鹿

そこを出て街はづれまで歩いてゆくうちマラソンが應援にわめき立てられ乍らやつてくるそうして一時は賑つた街も又元の靜けさにかゝり踵を返した一行は飯時のこと故そのあたりで腹をこしらへ裏山につながる小千疊にのぼる。此處は銀行王の安田が金にまかせて豪奢な庭園に造り上げ一般人に解放した山で人工そのまゝだが自然らしい落ちつきは消ゝやらず所々に全國の觀音像ら祭つてある。

ぐみの實を拾つてる連後に　駒人

途中に安田翁をきざんだ大理石ありやがて一段下の見晴らしにきてその東家で娛鹿氏の買つてきた名物虎子饅頭を馳走になり乍ら作句に浸る。

勤儉の二字で建てけり小千疊　美智坊

小千疊で虎子饅頭と山の味　同

頂上にあがつた時にはもう午後の冷氣が海からくる風にふくまれて眼下一望の大磯に早や晩霞せまらんとして頂上には唯明治天皇の觀漁碑が白く冷たく立つて太平洋上を睥睨してゐた。

はるばると登りて拜す觀漁碑　香川

一行いそいで山を降りて驛にくるゝ繪葉書にそれ〴〵寄せ書きをやつて歸塚した

（平塚支部）

……（九頁よりの續き）……

士イの山は文字にも表裏なし

富士山は上から見ても同じ型だ、富士山の三字は表から見ても裏から見ても同じだ、これが狂句だと結むだら拍手。アンコールだからモ一度顔を出さねばならぬ、諸君々々、大内青巒これも表裏のない山だ、

（B）の方は餘りに上出來過ぎるが嘘ではない、巫素東朝の旅客機に試乘したいが、喘息持でよと話してゐたから……枕元には綱島氏の梁川集と大内先生の佛書が置いてある關聯であらう

◆

欲しいものはと尋ねるから、燒芋。

大阪では一ケ年三百五十萬圓サツマ芋をくひ、その六割五分郎ち二百萬圓以上が燒芋だと云ふ、本當だとすれば、病人の私が必ずしも食辛棒だとのみ言はれなくてすむ、江戸では

堀江町團扇とみせて薩摩芋

サツマから奈良へ飛越す堀江町

堀江町風しづまつてサツマ芋

燒芋繁昌の有樣は江戸名物鑑に唐茄子、初夢や一ふじ二たか十なすび、薩摩芋後の月みよ七またのくだり芋これ專行はるるの始なり、江戸繁昌記には蔗薯、原出呂宋國、明萬曆中、始入漢土、元祿戊寅、琉球王傳之于我……〻薯行于都下、今已久矣、然煨食之行、亦興承食同一時也、關西稱琉球薯、關東呼薩摩薯江戸婦人皆曰呵薩、然今各店招牌、書曰八里半、‖八里半は九里(栗)に近しの意‖今則滿布海內、食之不論貴賤、値亦甚賤、薯戸冬間所鬻、少者不下二三十金及至百金、云久今試酌其中、一戸五十錢爲額、以八百八街中一街一店之、數而計之、猶一歲之分、積爲五千金、細算之、必不下萬金、嗟夫玆土繁盛、可知可想、

古句質疑

蛭子省二

（十月號四十一頁「菅笠は野宿の上も天照らし」の句の説明の續き）江戸時代になつてからは寛永十四年寛文元年なぞ流行して居るけれど、寶永二年乙酉四月の頃のは尤も著しく傳染的に行はれ其の模樣は諸書に詳記されてゐる、武江年表が簡略だから抜いて置かう『閏四月上旬の頃洛中洛外童男童女七八歳より十四五歳に至り貧富を論ず抜參りをいたす事夥し、難波寧樂はさらにもいはず、畿内一時にいひはやらして諸人狂せるが如く、妻子從僕其主にいとまを乞ず、家を棄て參詣す、伊勢街道は往還莫大にして錐を立べき地もなし、凡參詣の男女一日に二三萬より四五萬人、或は六七萬人と云り、時に洛中有福の族神威を敬ひ奉り、或は米錢或は布木棉の小袋、襦袢、菅笠等を整へ、五條三條の橋詰に持出て、抜參の男女に與ふ、しかのみならず江州膳所の城主報恩の船を出され、又伊勢の所々には貧き諸人の所勞の宿旅籠など設らる、又秋七八月に至ては諸國遠國よりの參詣勝て計べからず、京師には別て神靈をいふ事少からず、或數十里の處を二三日に往還せし談あり、或は死せしものを葬りし後其人悉く歸りし話あり、又は爰には秡の大麻箱降し、かしこには伊勢にて降し大豆を焼みて藏め置しに、忽太麻と變ぜしなどいひののしる、此時のさまを委しく記して寶永千載記と題する草紙ありとなん、又本居大人の玉勝間にも見ゑたり』丁度修學旅行時期の男女學生が醜をなして參拜する光景以上であつたであろう、宮川舍漫筆末尾にも御蔭參の事。大神宮御神德に奇談珍話が載つて居る。

江戸を出て姿の出來るぬけまいり

品川へさしかかれば、愈々抜參り氣分になつて、菅笠も被つたであろう、

村の弟子げつそりとへるぬけまいり

村の弟子は手習子の事、「どうれいと大勢でいふ手習子」。「猫の目を時計につかふ村師匠」。「村師匠山鳥の尾をたてておき」

抜まいり此の春思ひ立のまま

立のままは、ふだん着のまま、卽ち抜詣り姿にふさはしい。

三人で尻をれらつて抜けまいり

特に三人でせしは、三寶荒神と云ふ鞍で三人乘れるように左右にワクがついて居る、五人女に、相坂山より大津馬を借りて、三寶荒神に男女の一つに乘るを云々「割合ってのれば三方安あがり」。「伊勢の馬鬚といふ字にのせてゆき」。「三人で駄賃を拂ふぬけまいり」

出しぬけにかぶるは見世の三度笠

三度笠は菅笠の一種。『貞享の比より三度笠とて、飛脚馬上にてねぶり、落馬しても鼻をうたぬやうに深くしたる菅笠、旅人かむる者多し、享保の末より道中笠

に定る』

抜まいり笠をばかぶるものにせず
男でござるとひんまくるぬけ參り
居風呂へみんな飛込むぬけまいり
ぬけまいり人のなさけを汲むてゆき

柄杓一本掣帶して報謝を得た、「汲分けてひしやくを通す御關所」「一本のひしやくで參るありがたさ」。

神恩も深江の笠でぬけまいり

深江の笠とは菅笠の一つ。「今も此所名産にて伊勢首頭にお坂はなれてはや玉造、笠をかたなら深江が名所とうたふ、深江は攝津の國の東なり、古より難波菅笠は名に聞えたり

駿河までゆくは大きなぬけまいり
駿河まで道聞きにゆくぬけまいり
春の日にぬけまいりする大年增

春日局一件

尤も一本のひしやく賣許りではなく、伊勢講の組織の下に、月々醵金して抽籤により、一團こぞつて參宮した、これを太々講ともいつたのは、太太神樂をあげる費用を積立てたからである、

女房へ落ちて伊達な伊勢講

伊勢講と出て内をまじなふ

室町殿日記、上京今出川に大宗坊といふ客僧、伊勢講中の懸錢方々より借用し、何れも返辯せざりしかば、檢斷所へ訴訟中によりて裏書を出されけり』

伊勢講へ其後こりて親父が出

息子は伊勢講をだしに、足近な吉原へも行進曲を演じたのであらう、丁稚小僧の扮まいりの行はれた他の理由は、主家の金をつかひこむだ折りなごに、扮參りをしてお祓をもち歸り、詫びすれば却てほめられて許された、馬琴の胡蝶物語に年季二三年勤てわる業が入るとはや拔參と出かけて、柄杓一本に五十三驛を股にかけ明てもも暮てもこわいものなく、乞食を三日すれば、忘られぬといふ諺にもれず、これから勤がいやになり、のうらくものになるもあれど神の導き給ふとて、その座は免されても、殘る七年を勤果るは稀なり、とある、

お秡でわびごとをする樽拾

半日閑話に、明和八辛卯三月よりおかけ參り初る、とありて五月上旬には二十四五萬人に及むだ由、天保元年も亦非常に盛むであつた、十月頃やみ、文政神異記に詳である。

文政より天保迄おかげ流行

の句がある、銅脈先生の伊勢道中に、京都勿論至遠國、今年無人不參宮、皆謂御陰爲拔矣、……萬人講中仰山伯、三寶荒神惡魔姦僮風忽破麁行笠、滿腹屢鳴撫待茶、草鞋直貴買片隻、片隻尻斷長刀斜、乞食稽古今漸熟遂には犬や猫がお伊勢參をした話もあり西國邊よりは牛の詣でし事が記されてある、

錢首で犬も出かける伊勢參

首にゼニをつけてゆく事であらう、辭書をみると錢自は錢持首の略語で、ぬけわもんの反對に衣の衿を前に引きつめて著る事、錢を多く懐中して衣の領の前へひかるるさまより稱せらる。犬子集、貧乏人は笑はれぞする……衣紋をば錢もち首に引きなほし、後撰夷曲集、ひだるさに寒さにすくむ襟つきよ、錢持首は名のみなりけり、

前に太々講、太々神樂とかいた、古句に澤山ある

濱荻で太々餅の日除をし

太々夜共一人にはなしいもの

の太々は關聯したもので、三養雜記に、太々神樂といふことはいつのほどよりか始まりけん、都鄙をいはずおしなべて太々講といふことさかんに行はれど、もと太々神樂に既にもいへる代樂におなじこころばえにて、かの講中の人々にかはりて神樂を奏するからに、代神樂なるべきを、なほひときはなみならず執行ふよしにて、重れて太々とたたねていへる稱なれど、かつてわからぬことなり、又一萬度の祓とて幣串を講中へ配るにその串をいるる箱をやがて御はらひとなふるもをかしかるに、もと祓といふことは今さらいふべきにもあられど、二季の大祓は公事にて中臣氏の司るをもて、その祓を世に中臣祓ともいへり、しかるをかの佛家によむ、經の卷數にならひてとなふるは、いとも心得ぬわざなり、大般若の理趣分、かつは眞言陀羅尼を千度も一萬度もよむを、ことさらに功德あることにいひ、その讀たる數を記したる札を、卷數と唱へて施主へおくることなり、今の大般若經などの札といふものは、この卷數のなごりにて、その札がたふときにあられど、卷數しるしたるもの故、それをやがて尊信することなり、この卷數に倣ひて、千度一萬度の祓などとて、幣串を祭主へ配ることはおもはれたり、

一萬度大きく　守り　たまふなり

引越の　初　手の　車　に一萬度

沖をゆく船の　おもしに　一萬度

新宅の魂入れる　一萬度

一萬度　直きは麻も神心

この『麻』は大麻にかけたもの、ぬさの事で祓の大串につけた幣帛であるが、お祓か終れば引よせて撫でたものである、

大麻　倶に配られたものに暦がある、伊勢暦と名づけ、卷首及下段を何人にもわかり易いように、平假名を主としてかいてある、これは神職と暦博士加茂杉太夫の考案であつた、土御門家の暦本を祭主藤波家がうけ發行する、暦師を佐藤伊織といふ、明治に至り古のものを議し、官から頒つたが明治十六年伊勢司廳の手による事となつた、

お祝かすむと暦も　細　字なり

伊勢暦太々とかく三ケ日

上段下段と目を配る伊勢暦

而笑子翁逝く

柳誌『媛柳』の主幹而笑子窪田幸太郎翁は十月廿七日六十三才の高齢にて逝く、牌名は『貞山惠幸信士』翁は慶應二年三月十五日東京市小石川區水道町に生れ、明治三十年一月俳諧即春秋園花兮の門下として立机春韶園道雄の雅號を贈られたが、後川柳に轉じ田能村朴念人氏の死後を襲ふて明治三十八年頃讀賣新聞柳壇の選者となり、同四十一年に同新聞社の會計係りとなつて入社し大正八年十二月まで同社に勤務し、翌九年一月小柴印刷會社に入社、今日に及んだのである。

翁は叙景句や家庭句に獨特の境地を拓き、讀賣調と云ふ一派を形成して、一時は坂井久良岐、井上劍花坊を向ふに廻し三派鼎立の形で東都柳壇に可成り活躍したものである。

翁は明治三十九年讀賣同好會を作り『同好』といふ柳誌を編輯をし、同時に『ハガキ文學』の柳壇の選を爲し、其後『滑稽文學』『川柳とへなぶり』『柳眉集』『現代川柳』等の柳誌を主宰してゐた大正八年から『媛柳』の主幹となつて後

半生を川柳に献げた人であるが晩年は柳壇的に寧ろ不遇な位置にあつた。

翁は一見非常に温和しい人で、そして極めて規頂面な質で、物にきまりをつけないと氣が濟まないと云つた風の人であつたが、なか〳〵の負ぎらいで、年をとつてからも老人扱ひにされるのを嫌ひ、若い者と一緒によく酒を呑んで若返つてゐた。

翁が如何に川柳に熱心であつたかと云ふ一例にいつも引き出される話は大正十二年の關東大震災の時に、避難した大樹の下で悠々と謄写版を引き出し鐵筆をふるつて『媛柳』の原稿を書き、その發行が震災の爲に遲延しては讀者に濟まぬと家人の止めるのも肯かずに原紙を書き終つて謄写版を刷り、たくさんふことを見ても如何に翁が川柳の道に精進されたかと云ふことが分る。

翁は東都の柳壇は勿論であるが『媛柳』によつて愛媛縣人の川柳家の指導に盡した功績は沒すべからざるものがある。要するに翁は現在の柳壇から言へば過去の人となつてゐたが、壯年時代の華やかなりし活躍は、川柳史の一頁を占めるに十分なるものがあり柳界の鳴雪翁として長く記臆されるであらう。

大棗子兄を悼む

安西杏三

我等の柳友桃哉、其象の兩兄が逝き涙猶新であつのに、今〻又大棗子（塩田台三（逸錢）君の訃に遭ふ。人生の匆々たるに茫然自失するより他はない。

一週間前に君を見舞つた時、よく笑ひよく談じたるに、十月廿八日刀根山療養所を訪れた私は、其朝大棗子君の永眠された事を知り、温容再び見るに由なく、又相語る能はず、靈柩に涙と共に香華を手向けた。

君は頭腦明晰にして而も温厚篤實なりしも、悲しむべし、天二物を能へず、生來蒲柳の質にして、二十歳に滿たずして痼疾の冑す處となり、爾來…床に親まれた。

前途に世上の光明を失ひ徒らに青春の消え去る焦慮と、絶えざる病苦とに、身心を委せなければならなかつた君の心の裡は如何であつたろう。併し君は徒らに運命に屈服するものではなかつた。此心の惱みと身體の苦痛とを凝つと見詰め之を川柳に表現することに依つて、總てを淨化し、永遠の生命を創造することを知つたのである。

君と相識つたのは大正十五年頃で未だ元氣で手帳とペンとを持つて共に散歩しつゝ作句に勵み、疲れゝば草叢に仰向けになつて柳論を闘はしたものであるが、君は川柳に於て自分より先輩であるのに拘らず、年長者に對する禮を失せらるゝ事は決してなかつた。

其後の君の創作慾は旺盛にして其投句は川柳雜誌の他五六の柳誌に及び、何れの雜誌にも堂々の陣を張つて居た。後不幸にして病が重られてからも時々ものせらるゝ句は皆鈴吟で自分等の到底及ぶ處ではなかつた。駄馬百日の行程は駿馬の一煽に如かざる事を痛感せしめられた。

君の句は着想非凡にして技巧よく之に伴ひ朗々すべきものばかりであつたが特に病の句の如きは讀む者の肺腑を突き慄然たらしむるものがあつた。

遇然にも二人は胃腸惡しく、腹を打たゝいては『腹の惡い人間』と笑ひ合つたが共に度々よく危期を脱したのに、遂に君は立たず、嗚呼。

君は危篤に落入るや既に命數の迫れるを知り家人病友を集め今迄受けた高恩を謝し一々禮を述べ合掌眠るが如く逝けりと。行年僅かに二十四歳。

此不幸裡に更に私の心を暗くするものは君の遺稿が發見出來なかつた事である君は作句すれば必ず手帳に之を記す最近

の分が二三冊に及んでゐる事を知つて居るのであるが整理の際紛失したものらしく、一冊も見い出し得なかつたのは千載の恨事である。

今や君は、眞善美の圓滿せる、無量光明界に悠々自遇し、我は具さに浮世の辛酸を嘗む。何れが幸福？

蟋蟀が遺稿をさがす手にとまり　杏三

新しい墓にコスモス搖れて居る　同

大槲子句氏抄

ラヂオでは彌次られもせず無事に濟み
長患ひリンゴの色もなつかしし
妹の日記兄への貸があり
モルヒネがあれば何時でも死にまする
生みの母ですと寫眞を出して來る
夏服は安くつくので着てゐます
大金を拾つた記事に羨んで
病氣からこつち眼白もほつとかれ
眞帆片帆生活難の目にもよし
花氷身分の違ふ事を知り
飛石の盡きた所でつゝじ咲き
二階借り今日はしのだを取るつもり
文化村今日も肥料の風が吹き
亭主又隣のあらを聞かされる
忠告をしてからこつち遠ざかり
此頃は妾ためるにかゝつてゐ
唐辛子飛ぶのを見れば赤蜻蛉
貧しさと拾つた金と良心と
お隣の子には繼母菓子をやり
聖書なぞ讀むのかと友見直され
もう夜逃げする氣で今日も飲んでゐる
學校もすぐ金になる方をより
自轉車を丁稚は寒う出して來る
さしあたり食はねばならぬ盜みにて
當直を信じて妻の無事な顏
ごもならん息子だつたと賴りにし
籠の鳥昔の唄で春を告げ
交番を見ぬやうにするきずを持ち
ヒステリー惜しい着物に穴をあけ
これからが俺の世界を養子病み
書置に死ぬと云ふ字の無いもよし
見榮に云ふ嘘に女はしやべりすぎ
内職へ子は健氣にも茶をわかし
鳥籠で育つて逃げもせず歸り
紙屑屋捨てると云へば持つてゆき
噂なぞどうでもよいと强くなり
自殺した人を笑へぬ淋しさに
金のある間彼女を喜ばせ
妻に似た顏になぐさめられてゐる
牛乳と玉子に追つめられて死に
れんげ草寢ごろんだまゝ手を伸ばし
醉さめて父に似てくる事を知り
看護婦の手が何氣なくふれて來る
そのひげもむくると成つて國へ去に
頭痛する日は返金のあてもなく
今日も又汽車が都へ行けと云ひ
二十歳頃ひけといふのをつまんで見
宗教の本さ淋しい顏をして
憎々しあいつへ罰を待つてゐる
病室を出ると眼につく土と空
家出した眼にあてもない色電氣
群集と云ふ數に入り寫される
善行のつもり金持金を出し
毒藥をあれかこれかと馬鹿々々し
雨降れと云ふのを聞けば米の値か
石一つ叛く形に出來上り
拜啓と書かぬ手紙の君と僕
南無阿彌陀合はす兩手の際に風
寢ついては雲も心の窓に觸れ
見舞客滋養をこれのよく食への
鳥籠へ雀取柄もなく生れ
金がない丈の相違と思つてゐ
鼻高く高く神經質なりき
天井のしみが氣になる宿につき
笑つたと云つて娘はもう言はず
泣いてゐる布團の裾に風が入り
自殺した後の姿も考へて
死ぬもいそがしいなあ爪を切ら

各地柳壇

川柳雜誌社 各支部聯合 御大典奉祝句會

十一月五日夜　於日本橋倶樂部

幔幕に提灯に彩られた街頭に御大典奉祝氣分濃かである一月五日夜、明日しも陛下宮城を御發輦の頃夜本社の各支部聯合の奉祝句會は各支部を代表して道頓堀支部幹事庄萬よし氏司會の下に開會され。

一同靜粛に作句奉祝の赤誠を披瀝して、萬歳聲裡に散會した。

尚本會のために左記各位より寄贈品をうけ佳作にそれ〴〵賞しました、御厚意を厚ふ感謝致します。幹事

（寄贈各位芳名）

住吉、糸屋町、北濱、天満、京都、神戸各支部、本社、路郎主幹、素人、加香、琴人、三笑、ひろし諸氏伊藤一堂

（來會者）

路郎、月下、春汀、悟堂、素人、昌雄、守天、一柳子、惡源太、一舟二映、桂枝、昶、舟々、太閤、里十九、稔、伊佐美、樂天、桂風、瓢山、雅流、幸泉、二南、海水、卯生、文蝶、一杉、萬年青、五輪黒天子、貴山、孤舟、双柳、鮎美、萩麿、亂耽、源坊、津葉佐、新水、双葉子、ひろし、靖弘、鳴玉、翠峯、呑陽、觀月、露斗、虚白、鴻堂、有陀、武子、彩秋、春彦、かい痴、陽氣亭、嶺月、琴人、柳狂、小蓬、文久、閣路、丸葉、柳渚、紋太、赤丹、すみを、革郎、たけし、つぼや、壺中、蒼梧樓、悟郎、萬よし、正二、加香、三笑、和正堂

兼題　神馬　路郎選

御神馬へ心斗りの頭下げ　南耕

銀杏の實一つ神馬の背か叩き　町二

神馬今豆にも飽いた目をつむり　鐵洲

吉といふ御籤神馬の聲を聞く　普門

みみづくの啼く日神馬へ寄せる風　哉

御神馬になつて何んだかやせたよう　葭舟

朝日を浴びて神馬の馳けたからう　菊三

傳説の神馬寂しく老いて行き　三猿室

天馳ける話へ神馬こそばゆし　毒仙

悪神をけちらすような神馬の繪　柳渚

いなゝいた神馬の聲は淋しすぎ　華水

神馬ちと走りたいなと思ふなり　卯生

神馬にも嬉しい秋がせまつて來　閣路

神馬また通り過ぎると鳩が下り　源坊

神馬悠々日は徒らに暮れて行き　春彦

秋空へかゝはりもなく神馬居る　小蓬

于守等へ神馬は床を蹴つてくれ　嶺月

神馬もう神に通じる樣な聲　一舟

見て通る神馬いつでも痩せてゐる　新水

足音に神馬は首をつき出しぬ　悪源太

迷子へ神馬は首を振つて見せ　舟々

（客）飾られて神馬おぼつかなう歩み　同

（同）宮詣り神馬のとこもまいつて來　靖弘

（同）足元の方から神馬日が當り　桂風

（同）何事かもたらすやうに神馬なき　亂耽

（同）嘶きを忘れて神馬廢入るなり　翠峰

（人）神馬へも賴んでかゝる子の病氣　卯生

（地）神馬もう馬と云ふ性なくなつて　翠峯

（天）金の無い顔を神馬に見詰められ　翠峯

席題　嘘　紋太選

震災に燒けたか嘘にしてしまひ　たけし

嘘ついて出ると鼻緒が切れかゝり　愚陀

門をはずして嘘を承知せず　凡平

憶病な心に嘘がつゞくなり　双葉子

父の嘘もう母親は知つて居る　里十九

嘘を云ふ煙草何度もはたくなり　月下

耳元へ小聲になつて嘘を言ひ　桂風

嘘もよっつかずに節季をやせてゐる　テルホ

大法螺も聞かねばならぬ場にて　虚白

嘘ついて歸るにしては明かるすぎ　翠峯

（客）さて膝を合はすと嘘が詰るなり　同

（同）嘘らしい話に酒がにがくなり　かほる

（同）落付いた嘘へかき餅燒けてくる　鮎美

(同)今までの嘘がばれてる御前様　路郎
(同)見えすいた嘘も全快嬉しがり　春汀
(人)嘘ばかりついてゐる娘のはなやかさ　二南
(地)わが嘘を味ひ乍ら灯にそむき　亂耽
(天)つい嘘を云ふて了ふた初對面　卯生
(軸)嘘になるわが信用に舌をうち　紋太

席題　秋　文久選

迷い兒の秋一遍調べられ　孤舟
羽子板に秋は肩の上へ越し　月下
あわてゝる秋へすきな煙草入れ　華水
後から女房が秋引いてすみ　卯生
尋れても言はず秋をさぐつて居　嶺月
音のする銅貨へ秋のもてあまし　萬年青
プログラム秋へ入れたまゝの朝　聞路
秋ある着物君が代よく揃ひ　萬よし
秋から燒芋も出る十二三　黒天
秋から秋へ移す物があり　幸泉
切れた夜の乘換券が出た秋　源坊
錢の音秋にさせて若さ見せ　琴人
いれた筈秋をさぐる風呂の札　ひろし
寢不足の秋にマッチ二つあり　文蝶
秋から青いみかんを投げてやり　桂風
納得の顔に秋が濡れてゐる　舟々
元祿はまだ白粉もつけぬ頃　月下
十八になつて秋がよく動き　双葉子
落籍されてたすきをかける秋なり　同
丙午長い秋のまゝ暮し　路郎
(客)處女といふ秋のぶらり〳〵　同
(同)秋着た息子となつて土間へ立ち　テルホ
(同)疑へば秋一べん揺らせる　雅流
(同)秋から突き離されて木の頭　素人
(同)立ち話し子供秋を持つて待ち　聞路
(人)恥しい秋がすべる段梯子　舟々
(地)秋から鉢ぐるみ出す御裾分け　伊佐美
(天)失敬な人に秋を持ちかへる　二南
(軸)人形の秋に殘るはじき玉　文久

席題　玄關　春彦選

玄關で優等ですとなりこむ　柳渚
玄關子ほぼ人相も云ひ添へる　双柳
目出度さは玄關迄も開け放し　文蝶
玄關へどつしり里の芋とゞき　桂風
玄關の靜けさを這ふ蝸牛　萬よし
乘り捨てた木馬玄關に倒れてる　一舟
玄關から父上と言ふ顏になり　素人
玄關に行きつ戻りつ影法師　泰山
どもかくも玄關まではついて行き　里十九
玄關の赤い鼻緒にはいり兼れ　たけし
玄關の犬咬みまゝと恐はがらせ　鴻堂
玄關子今日はお馬になつて居　瓢山
玄關で書留少しもめてゐる　呑陽
待たされてゐる玄關を覗き込み　春汀
玄關へ蹄をはづし〳〵出る　彩秋
玄關で奥まで通る聲を出し　二映
大大阪の玄關と云ふ梅田驛　溪水
春の陽は内玄關へ伸びて居る　露斗
玄關へ集金人は小さく立ち　孤舟
玄關へ着くと醉ふてる親旦那　路郎
(人)玄關に要領を得ぬ女なり　双葉子
(地)玄關へ腰低う來た國の父　源坊
(天)玄關へお見舞の聲靜かなり　黒天
(軸)自序傳の初めを飾る玄關番　春彦

席題　油斷　素人選

油斷から丁稚に肌をみつけられ　かい痴
二三日油斷をすれば蠅が飛び　鮎美
妾宅に油斷の出來ぬ女中が居　悟空
吸殼が基敵捨てたつもりで居　嶺月
馴れきつたベルトに觸れた怪我で　虚白
油斷なく醉ふて下駄の蒲團を着　亂耽
高らかに笑ふ間も油斷なし　貴山
油斷なく廻り夜警に暇な晩　春汀
遊ぶ子へとても油斷がなりませぬ　觀月
油斷してゐて溫度表にびつくりし　新水
油斷した奴に打たれるホームラン　五輪
油斷なく歩く女にどろをかけ　武子
悄氣てゐる一人に掏摸のゐたが知れ　紋太
油斷した事を夫婦で笑ひ合ひ　舟々
盃の數に油斷をして了ひ　二南
衝突は助手にまかせて居たと知れ　孤舟
(人)戀文を見付け吾が子の年を疑ふ　源坊
(地)油斷せぬ男へ向ける憎惡の眼　稔
(天)油斷ありすきあり人氣ある男　萬よし

席題　若侍　かほる選

若侍新町橋にさしかゝり　素人
若侍醉ふともなしに醉ふてゐる　二南
早飛脚若侍へ届けられ　一杉
掛茶屋へ四五人で來る若侍　柳狂
祇園から若侍は見送られ　聞路
戀もなく若侍の腕がきゝ　彩秋
若侍刀のにぶる人に逢ひ　雅流
鈴ヶ森で若侍は腕を見せ　春彦

早まつて若侍は腹を切り　孤舟
付け文をして叱られる若侍　翠峯
若侍の方へ彌次馬肩を持ち　テルホ
尺八も若侍の心得て　双柳
若侍へ茶店の親爺意見する　嶺月
若侍會へば釣竿さげてゐる　靖弘
寺にゐる若侍に曰くあり　鴻堂
同輩の妹に戀れる若侍　亂耽
梅白う若侍の母へ文　太閤
嚴格な父にもつかへ若侍　武子
若侍締り切つたる帶へ差し　舟々
佳若侍燈籠の影へ誘はれる　同
(人)供のない若侍へ花吹雪　閑路
(地)耳打ちに若侍はもう勇み　ひろし
(天)若侍獨り思案へお手がなり　愚陀
(軸)若侍みけんに瘡を受けてくる　かほる

席題　鶴　ひろし選

エプロンと共に鶴洗はれる　丸葉
病んで居る子の折鶴に母も笑み　伊佐美
吸物に鶴らしいもの見つからず　琴人
鶴の夢あすの相場を待つてゐる　呑陽
鶴の聲背の子供に訊ねられ　雅流
仰むいた姿で鶴は寫される　春汀
ひな鶴の献上されるとも知らず　双柳
鶴の首逃げた泥鰌へ長うなり　悟空
落着いた鶴は泥鰌を見逃さず　萬よし
羽擊きの鶴は大きな姿なり　孤舟
くたびれた形で鶴は足を曲げ　源坊
廢兵の姿で鶴の思案なり　亂耽
鶴の戀たゞおとなしく遊んで居　翠峯
鶴が鳴く戀の二人へ鶴が鳴く　嶺月

露斗
嶺月
舟々
ひろし選
二南
春汀
源坊
里十九
琴人
鴻堂
彩秋
華水
萩麿
愚陀
月下
鮎美
卯生
双柳
双葉子
黒天子
悪源太
雅流
悟空
文蝶
太閤
二柳子
一杉
亂耽
孤舟

(三)鶴首を伸して今日の日の長さ
(二)鶴のそれ〴〵遥ふ格好
(一)別莊に殘り淋しい鶴一羽

奉祝

(軸)天聽に達せと鶴の啼く姿　ひろし選

席題　幕　互

辨當へ幕賑かになつてくる　二南
まだ開かぬ幕へ子供の首が出る　春汀
幕あけろ亦拍子木が一ツ鳴り　源坊
ごたゞがあつて幕間長うなり　里十九
幕ばかり見せて初日の半値也　琴人
幕合は棧敷の口が頁く動き　鴻堂
幕合ひに便所の留守を賴まれる　彩秋
開幕へ煙草火鉢へさしておき　華水
卷あがる幕に場内靜かなり　萩麿
斬られた捕手幕を待つてる　愚陀
馬の足花道へ出て幕が下り　月下
鴈次郎だけが殘つた幕の外　鮎美
泣いたのは暫く幕を見つめて居　卯生
こゝからはたゞで這入れぬ幕を張り　双柳
町内の顔が幕屋に揃ふてゐる　双葉子
町内の幕の高さでもめて居る　黒天子
幕に手がとゞいて子供うれしがり　悪源太
さし上げた子供は幕をうれしがり　雅流
幕吊て格子の掃除せずに濟み　悟空
奉祝の幕にも派手と地味と出來　文蝶
夜と晝とつきりなしに幕のゆれ　太閤
空高く幕おだやかに搖れて居る　二柳子
しつとりと幕は朝日を吸ふてゐる　一杉
夜の幕ひらけば強き白色よ　亂耽
幕の色變つて廣い街になり　孤舟

幕張つて丁稚ゆつくり飯を喰ひ　同

席題　奉祝　互

奉祝に同じ心が旗の波　選
提灯の海に日本の誇り見せ　津葉佐
天高くうたへよ聲のかれるまで　かい痴
菊の香の漂ふ空に歌ひかけ　三笑
赤白で町をつゝんだ御大禮　たけし
奉祝に嫁の自動車つきあたり　丸葉
奉祝で結婚式が早うなり　武子
加茂川へアーチかすかに映るなり　里十九
待つてゐてまでも乘りたい花電車　月下
奉祝は幕や提灯ではありません　小蓬
奉祝の寄附は斷る道がなく　瓢山
奉祝で祝ふつもりが幕でもめ　萬年青
奉祝に一致した町空が燒け　黒天子
此の世帶旗提灯で氣を安め　柳狂
奉祝へ國の母親來ると言ふ　赤丹
奉祝の幕へまんざい突當り　貴山
行列をこつそりわけて若旦那　呑陽
奉祝の街を一對蝶が舞ひ　悟郎
お目出度い今日を祝つて菊へうち　寺泉
長屋から養老盃を一人出し　孤舟
奉祝に下戸も盃受けてゐる　彩秋
奉祝に酒屋ニコ〴〵顔で來る　鴻堂
警官も祝杯の色顔に見せ　かほる
奉祝に兎に角醉ふた戎橋　春彦
當日は朝つぱらから飲むつもり　二南
變裝に五十の女醉ひつぶれ　壺十
奉祝の街を二人で醉ふて行き　嶺月
奉祝の町も疲れて歸つて來　伊佐美
奉祝に丁稚散髪してるなり　閑路
文蝶

奉祝に丁稚休める日が續き　双葉子
奉祝の町から町へ無一支　桂風
陳列のシルクハットの賣れる秋　文久
今日の佳き日を謹みて朝の膳　蒼梧樓
杖にすがつて龍駕を拜す今日　ひろし
國民のいそ〳〵旗を立てる朝　亂耽
萬歳の聲に病む子の氣が勇み　雅流
御大典に
病んでゐる身にもかどまで出て祝ひ　路郎

川柳雜誌社
堺支部　**創立句會**（堺）

明治節の夜　於大濱家族湯樓上

厩生路郎先生をお迎へして、堺支部創立句會を大濱湖湯家族湯樓上にて開く、明治節のおごそかな一夜を熱心なる人々にて川柳に精進した。（貴山）

（參會者　路郎、素人、武子、琴人、松風、竹鳳、兎歩、凸樂、春汀、二映、周歩、巨水、萬古、文蝶、平八、瓢山、萬両、黒天子、樂亭、一杉、多聞、二柳子、かほる、不越、局才、双柳、呑陽、貴山。

席題　聲　互選

寂しさが聲に出すのも四十すぎ　路郎
聲量豊かにれぶか節なり　素人
只ひと聲に耳を立て　武子
内證だと小聲で云ふて肩を打ち　琴人
すゝり泣く聲が聞こへて幕になり　周歩
よそ行の聲出すなと笑はれる　萬両
豆腐やの聲時計を一寸見る　巨水
話す聲低ふ成るほど耳障り　松風
貴賓室何んだか聲が少くなり　萬古
締切つた外へ親父の聲が洩れ　文蝶
聲だけで母親誰か知つてゐる　二映
ありすけの聲で悲鳴はよく響き　春汀
騒々しい聲も諸君で水を打ち　黒天子
聲丈けは元氣がいゝが疲れてる　平八
いゝ聲を聞いて戻つて嬶つかれず　一杉
掛聲の割に鮮人はかどらず　不越
聲のする方へ按摩が耳を向け　同
制し切れぬ聲に巡査は手をひろげ　多聞
浪花節帶をつかんで聲を出し　同

席題　角　力　周歩選

膏藥は待つた待つたの多いこと　一杉
萬古
旦那へはすまない今日の敗け角力　素人
負けたかと思へば勝つて居る角力　琴人
土俵際あぶないとこで勝つてゐる　春汀
大角力隣と話す暇が出來
惜しかつた所を角力は型で見せ　同
取直し始めに勝つた方が負　二映
夜角力の花形畫は車ひき　同
相撲場へ低空飛行の日本晴　兎歩
沈む日をあびて角力は正五番　同
待たされた角力の相手水を飲み　不越
稽古臺角力取らせて口を入れ　同
（人）負けたのへ大濱の風きつう當て　多聞
（地）眼は土俵相手構はずおしかけ　春汀
（天）弱そうなのが鹽ばつかりなぞつて　多聞
（軸）物云ひを行司柱へ聞き合せ　周歩

席題　家族風呂　かほる選

家族風呂永い廊下にコンパクト　呑陽
入口が横手に欲しい家族風呂　松風
家族風呂手拭一つ殘される　貴山
家族風呂四五人らしいやかましさ　竹鳳
家族風呂化粧半ばにベルが鳴り　素人
家族風呂あたり靜かに溫まり　不越
家族風呂女の頰を赤ふ見る　文蝶
寒むかつた事を話して家族風呂　二柳子
家族風呂細い廊下を並んでき　琴人
入口で少うしてれる家族風呂　周歩
よい仲になつて落逢ふ家族風呂　黒天子
家族風呂間を置いて二人出る　春汀
家族湯の男同士はもうあがり　路郎
家族湯に母はもつたいのうつかり　同
（軸）家族風呂窓を開ければよい　かほる

席題　炭　素人選

八ツ割りでザツクリ炭踏みつぶし　一杉
炭ついで〳〵淋しく夜が更ける　竹鳳
炭ついで板場バツトを吸ひ殘し　文蝶
御機嫌の惡いへ炭のおこらない　萬古
炭燒の家へ珍客尋ねて來　呑陽
切れ話くすぼる炭へ灰を掛け　かほる
湯上りの身に炭取をつき出され　武子
櫻炭手を揚つたを知つてゐる　琴人
言ひよかゝ氣の炭とりを引きよせる　多聞
支那炭をつぎ〳〵南蕭出來上り　路郎
借金のことわけ炭をつぎながら　同
（軸）質草も盡きた夫婦へ炭がはぜ　素人

兼題　美男子　路郎選

美くしい聲は嚴父の氣に入らず　松風
美男の子母に心配ばかりかけ　琴人
美男子に生まれず損をしたと云ひ　萬両
美男子の眼には憐れな女ども　春汀
ハンカチの新らた美男子持ち馴れる　文蝶

鉢巻をしても美男子よくつり　萬よし　多聞　かほる　素人
美男子に生れて無駄な過去をもち　貴山
美男子の後ろ姿の疲せて見へ　周歩
美男子に独口が見る癖があり　竹鳳
(人)美男子のむごい別れを　(地)百姓をするには過ぎた男前
(天)勉強中ですと美男の冷やかさ

席題　奉　祝　互　選

事毎に奉祝の文字入れてあり　萬両　黒天子
奉祝　萬歳といふ事なのよ　貴山
奉祝にやつと國旗を買ひよした　多聞
奉祝の幕幕幕の長いこと　琴人
奉祝へ踊れ〳〵の灯がともり　一杉
奉祝の街を通つて夜學なり　二柳子
奉祝にこゝから幕が逢ふ町　文蝶
奉祝に家主は自腹切つて居る　兎歩
奉祝の町にあぶない出前持　素人
御大典隣の町にまけない氣　同
御大典踊る着物も縫はされる　武子
奉祝へ踊つたろかと一寸酔ひ　琴人
踊り子の一人よごれた足袋をはき　孤舟
變裝が出來ると一寸踊つてみ　風鈴
提灯を燒いたまんまで踊つてゐ　同
踊り見踊れぬ我れを振り返へり　文蝶
白粉の顔へ踊の灯がゆれる　同

席題　安　賣　互　選

安賣に古いレコードかけてゐる　悟空
安賣に下町風がたかつて居　伊佐美
安賣を自慢の店はがんこなり　柳渚
店仕舞ひただやるように賣りつ　丸葉
安賣にキズ當然のようにあり　孤舟
安賣の人だかりに買ふた品　壽枝女
安賣の下手な文字へ二重丸　三笑
安賣の看板が飛ぶ空つ風　源坊
投賣の上に端錢を頂けと云ふ　同
安賣に女のほしいものばかり　武子
辛ゐ〳〵安賣の鮭　同
安賣の品とは違ふ物を見せ　新水
安賣の寒外今日も賣れ殘り　文蝶
安賣は直ぐ賣切れる樣に云ひ　同

席題　近　頃　三　笑選

晩酌も止めて近頃貯め初め　桂枝
覺めた戀近頃ダミなものを選り　新水
近頃は彈きませんのと糸を締め　源坊
近頃の俺は昔と違ふなり　一舟
氣の弱り近頃恐い夢を見る　孤舟
氣みじかの夫になつて近頃は　武子
近頃は毎晩酔ふて歸ります　素人
近頃になつて新婚よくしやべり　悟空
賣喰の近頃飯の味を知り　同
近頃はどうしてゐると脊を打ち　風鈴
素氣なうに近頃見へぬ事をいひ　同
近頃の景氣を言ふてお茶をつぎ　稔
近頃は豆腐で輕く呑んで去に　同
近頃の俺に忘るゝ事多く　舟々
近頃の母姿を見るにつけ　同
近頃の俺の氣持を唯れか知る　桂風
近頃氣分を女くせにして　同

席題　砂　糖　琴　人　選

又砂糖なめて留守番叱られる　丸葉
砂糖箱娘小ぎれをためてをき　柳渚
カルメラにざらめがすこし少すぎ　稔
砂糖屋は一寸入れては一寸とり　風鈴
お砂糖の箱の外まで流れてる　武子
蟻の協力に砂糖の大きすぎ　三笑
砂糖なら砂糖ともつと早く言へ　桂風
三越へ來てまで砂糖箱に決め　源坊
到來もなくて砂糖を買ひ始め　同
砂糖加減火加減コツク煙草吸ひ　文蝶
砂糖の素直さすぐ味になり　同
御歳暮の砂糖夏まである暮らし　新水
角砂糖母も話の中へ入り　舟々
一斤の砂糖を大家輕んぜず　同

兼題　青　素　人　選

青々として御手植のよく茂り　一舟
青空へ手一ぱいの聲で鳴き　悟空
青空を見上げて今日も金がなし　新水
鏡臺へうつるすきがみ青いかほ　丸葉
若草の萠る日下駄の輕やかに　稔
みつむれば水の青さの怖ろしく　壽枝女

ストローの青味に妻のセルもよし　三笑
眞青な海を流れる探照燈　武子
深々と水の青さの底に魚　琴人
青空の圓味に生きて無事な朝　文蝶
思ひ出に海の青さもなつかしく　孤舟
國を出る時蜜柑の青い色　同
榮つ葉服まだ折れ合はぬ兄があり　風鈴
死んで行く舞臺は青う照らされる　同

兼題　佛　源坊選

好きでしたお花を母の日にあげる　壽枝女
晩酌に佛の樣な父を見る　新水
命日を後悔うつかり忘れかけ　陽氣亭
暫は佛へ詫びる事ばかり　孤舟
生佛畠にこにをまいてゐる　伊佐美
兄弟のけんか佛が見てござる　赤城
(佳)佛佛佛の煙どこへゆく　同
佛の方はさいぜんからひとり　舟々
張つて來た乳が佛へ供へられ　風鈴
御見舞へ佛になつた香がにほひ　丸葉
貧乏を佛に罪にしてしまい　孤舟
天窓ノ青リ佛へとゞくだけ　翠峯
佛像の保つ光りにうなだれる　文蝶
(人)佛壇へ拍手をうついちらしさ　一舟
(地)追悼會佛へすまぬ話も出　風鈴
(天)運かつた佛の前へ來て座り　舟々
(軸)佛になるとみんなこわがり　源坊

川柳雜誌社　支部　別府

芽柳吟社創立句會（別府）

十月十八日於支部樓上　詫間三猿堂報

席題　茸　狩

何處をどう來たか茸狩迷ひ　入り　晃卓
茸狩のそれから皆んな呑むときめ　同
茸狩の踏みにじられしを惜しく取り　湯坊主
茸狩に彼女が連れではしやぎだし　三猿堂
きのこ取り入るべからずにくやしがる　毛無僧
茸狩の取つたあとから友を呼び　寶泉
わらじがけ茸は取らずに豆をだし　藤吉

席題　新　妻

足音を早やきゝわける樣になり　三猿堂
新妻のどこかに見へるたのもしさ　同
新妻があなたと呼びて向きかへり　長松
新妻へ友の挨拶かたくなり　湯坊主
新妻を妻が〳〵と友は云ひ　同
新妻が來て神棚に灯がともり　同
新妻はまだ〳〵他人行儀なり　晃卓
新妻の覺悟して居る世帶向き　同
新妻のたゞはい〳〵と遠慮勝　同
新妻は世帶の事を母にきゝ　同

席題　福　助

福助が座布團しいて居る小店　藤吉
福助に似た子と云はれ智惠があり　晃卓
福助はいつものなりでかしこまり　同
頭から福助ちりを拂らわれる　藤吉

席題　湯　歸

湯歸りのしばし浮世を忘れて居　三猿堂
湯歸りの肌に冷たい秋の風　同
湯歸りを風も心得顏に吹く　藤吉
湯上りの化粧の手附神に入り　湯坊主
湯がへりの目にしるこ屋の灯の明さ　寶泉
湯がへりの小間物店へ用が出來　晃卓
湯歸りのぶらり〳〵辻をそれ　同

川柳雜誌社　神戸支部

川柳の夕

十月廿七日　於四宮神社々務所

いとも靜かなる秋の長夜境内にすだく虫の聲を伴奏として心ゆくまで作句一昧に耽る。參會者廿名角力吟の試みなどあり有意義なる會合であつた。……楊井二南報

席題　猫　互選

虫を追ふ猫氣狂の樣に見ゐ　卯生
悠然と猫むつきより上を行き　紋太
猫の眼恐怖の色がわかつて來　二南
巡禮に座敷の猫は足を張り　一狂
二階借不精を猫に見つけられ　同
看護婦の邪慳に猫は部屋を出る　ひでを
物置の外で黑猫考へる　同
退屈を猫境涯と思ふて居　素生
家中の忙しさと猫別にゐる　同

席題　影　草人選

懷手夕陽に長い影を曳き　尺仙
はつきりと俺の姿を影が見せ　華水
障子へ影が大きくも伸び　卯生
ビルディングもう道幅を影にする　素生
夜撮しの何所やら影の匿れて居　紋太
雷燈が點り立聞影を投げ　文蝶
影の素直さに戸を締めに立ち　同
失職の他人影を踏んでゆき　嶺月
派出所午後二時と云ふ影をさし　同
寒そうな影が支閼までのびる　二南
驚ろいた影がしゞまを破つてゐ　同
(秀)麗かさ波に煙が伸びて行く　小蓬
(同)渚たゞ自分の影があるばかり　素生

(同)街燈の下から影が前になり　紋太
(人)ビルディング影から影へ窓が開き　ひでを
(地)鴻斷機の影もおんなじ樣に延び　紋太
(天)れんじ紋羽織を着せる影になり　山都

席題　停電　一　狂選

停電に探る手と手を笑ひ合ひ　明烏
停電に話をやめて横になり　卯生
停電に夜學暫らく靜まらず　素生
停電へまだマントルは破れたまゝ　草人
停電に女キチンと坐つて居　二南
停電に合槌を打つ上かん屋　同
停電に勝手を知つた下駄を履き　山都
停電に避難のやうにそとへ出る　同
停電はあつちの方を不審がり　紋太
停電は昨夜と同じ時刻にて　同
落ちぶれた樣に停電見せるなり　嶺月
停電を騷ぐまいぞよ男風呂　同
停電のかれこれ一時間になる　同
(客)停電に降りてコスモスを來る　ひでを
(同)停電の町を散歩は歸途につき　小蓬
(同)二遍目の停電からを寢てしまひ　素生
(同)停電に關せず火種吹いてゐる　蝶二
(同)停電の廊下に雨の音を聞き　草人
(人)停電に父は怒つてゐるばかり　二南
(地)停電に煙草の吸へる工場なり　文蝶
(天)停電の中に忙しい子供下駄　蝶二

兼題　松　茸　太選

茸狩が明日と云ふ日に雨が降り　春京
松茸へわずか故郷の土がつき　完二
茸狩に疲れて柿の皮をむき　二南
茸狩の一人は山を深く行き　華水
松茸を食ひ飽いて秋深うなり　素生
松茸へ口養生の愚痴になり　草人
茸狩りに日の短かさを今更に　小蓬
松茸が盛り昨日も今日も食ひ　同
松茸を見つけた聲がこだまする　山都
茸狩のポスターたやすく取れる　同
おさへつけられて松茸驛に着き　嶺月
お祭りに歸り松茸ぜめに逢ひ　同
(人)松茸がチギに仰山そうに乘り　蝶二
(地)晩酌の松茸今日は燒いてある　卯生
(天)靴を脱ぐ疲れに茸が香ふて來　二南
(軸)松茸ですきにしました禮が來る　紋太

角力吟　立志傳

(小)立志傳昔の戀も書いてあり　華水
(同)立志傳開けて口繪をほめて見る　團平
(同)立志傳枝葉をつけて出來上り　千年
(同)立志傳入墨のある人と聞き　草人
(同)立志傳救つて呉れた人知らず　卯生
(關)立志傳答禮だつたとは云はず　小蓬
(同)立志傳先づ東京の土を踏み　紋太
(大)立志傳悲しくなつたところで止め　蝶二
(同)立志傳ここが眞似の出來ぬところ　嶺月
(横)立志傳二階の人に似た話　二南

川柳雜誌　糸屋町支部句會（大阪）

九月廿六日夜　於寶樂會館　川合舟々報

兼題　霧　郎選

夜霧をぬけて碁敵へ行く　素人
灯の街に夕霧の込む美しさ　双葉子
夜霧はるかにシグナルの青　舟々
喘息の父朝霧へ立つてゐる　三笑
先生の馬車もう見へず霧はかり　源坊
朝霧にあごを撫でれば髭かのび　かほる
尖る心を朝霧へ吸はれ行く　亂耽
不意に土橋の搖れる朝霧　毒仙

兼題　空　地　ひろし選

蓑麻飯ノ稚空地へ呼びに來る　双葉子
塵捨てに行く空地から秋の風　翠峯
うらゝかな日なり空地へやつて來る　舟々
折合ひがつかず空地へ草が生ゑ　陽喜亭
空地から空地へ嘶く馬肥し　萬よし
(軸)ビルディングの夢に空地はほつぽり　ひろし

席題　金屏風　萬よし選

金屏風笑つて居れぬ日となりぬ　流星
金屏風ぬけ出たやうに小間使　ひろし
主家まで行けば有ります金屏風　翠峯
二ア人の影が動かぬ金屏風　源坊
金屏風馬鹿にも今日は着飾らせ　舟々
狂人が笑ひ續けし金屏風　同
(軸)金屏風喧嘩もせず叔父は叔父　萬よし

席題　軒　店　互選

軒店の隅で火のつくやうに泣き　毒仙
軒店へ眼鏡越しなる酒落もよし　翠峯
軒店でうまい天ぷら食はすなり　新水
軒店で資本を少し貯める氣の　三笑
軒店のやかんぽつ〳〵湯氣を立て　靖弘
軒店の家賃を問へば當てされ　萬よし
御大典近く軒店呼び出され　同
巡査見て軒店箱をとり入れる　源坊
軒店の方で集金人もらひ　同
軒店のきれいに掃除してかへり　双葉子
軒店は水をもらひに行たのなり　同

支那栗の軒店火鉢かゝえこみ　ひろし
金庫を背に軒店の頃思ひ　同
土砂降りの中を軒店仕舞ひかけ　舟々
息子とは別に軒店出してゐる　同
髭も剃らずにあける軒店　同

川柳雑誌社加古川支部

めだか尾上松林吟行

十月十六日　山本洛陽報

めだか滿一週年を記念する爲め黄彩、泰山、梅更五彩果余の五人午後一時秋日和の稻田を分けてなつかしの尾上に至る。着も女も無き料亭に於て一同酩酊の後薄暮へふへふとして歸途につく

食へるかと村の子供に茸見せ　黄彩
手ですごく稻の遙かに村太鼓　五彩果
料亭の二階にて
案山子の寒うなる頃刈り取られ　梅更
百姓の微笑に案山子哀れなり　黄彩
雀案山子の笠に戯れり　同
父親のお流れ纏ふ案山子なり　泰山
みのる田に案山子思案の首を投げ　洛陽
亡き父の思ひ出となる案山子なり　五彩果

天滿句會（大阪）

十月廿五日　於悟耶居　田中彩秋報

題　御神燈　孤舟選

逢曳の目に御神燈寒く見え　靖弘
御神燈今日の夜店に負けてゐる　五合
御神灯靜けき夜よ虫の來る　同
御神燈のほこり拭かれる日もなくて　赤城
御神燈母の入つた風にゆれ　同
御神燈に面白からず息子出る　舟々
神燈に女の話題進むなり　彩秋
妾宅はもう消えてゐる御神燈　悟耶
（軸）御神燈舞妓大きな影になり　孤舟

題　棚　舟々選

棚のものおろすに顔を歪めてゐ　彩秋
泣いた子を棚の上まで差上げる　五合
むつかしい客に扇れる別な棚　孤舟
棚釣つて仕舞へば休み正午になり　悟耶
女房の指圖で棚が出來上り　同
（軸）棚に向つて親子の丈が伸び　舟々
十人前棚に置かれたまゝ古び　同

題　芒　赤城選

北風に芒は敗けた姿なり　孤舟
遠道の芒のさこで吸ひ付ける　五合
何時までも芒に立つてゐてくれる　舟々
廢ころべば芒に誘はるゝ心　同
工場の敷地に芒伸びること　聞路
諸襟で芒の中を歸舍する　同
（軸）芒ちぎつてきせるを通す馬子　赤城

題　二度目　彩秋選

戻りにも同じ錠前おりてゐる　悟耶
二遍目の電話歸つたところなり　聞路
二遍目の勘當丁稚ついてゐず　赤城
二回目の家出へ近所知らぬ振り　孤舟
催促の二度目は少し角が立ち　同
（軸）交換手二度目のベルへついぴゃり　彩秋

川柳雑誌社鳥取支部

川端柳社例會（鳥取）

拾月十五日　中島鐵洲報

相談　聽松選

預けられる話しと知らず膝に寢る　源太夫
相談をされても養子丈ケの口　穗波
相談に伯父は煙管を打つばかり　耕民
相談の先に酒着を出して置き　一風
相談をしてゐに娘すれて立ち　ゴム
山分と言ふ相談の恐しく　青水
相談のなかばに子供目を覺し　湖山
次の間の話し病人聞きたがり　同
相談をしてとは態のよい謝絶　伯山
採手するばかり相談切り出せず　同
（軸）相談に後妻本家を煙むたがり　聽松

雨　舌長選

お通夜の時雨はけしく雨戸打ち　ゴム
傘丈ケを借りてフェルト持て餘し　青水
ポストまで手紙を濡らす強い雨　源太夫
悠然と時雨の河岸に糸を垂れ　伯山
梅雨の空ヒステリカルの日が續き　佳水
鉄勤に一日雨が降り續き　湖山
雨宿り一人に思わぬ傘が來る　耕民
雨宿り年増の方が話しかけ　一風
様々の音に雨漏り受けて居る　鐵洲
勇敢に自轉車濡れてく俄雨　穗波
稼ぐにも稼げぬ雨に空を見る　同

秋草　互選

枯れ薄二人の戀の果を見せ　佳水
頼りない様にコスモス咲き殘り　伯山
カンバスへ秋の深みの色を見せ　穗波
秋の草冬の近づく色を見せ　湖山
窓に描く繪筆に菊の盛りなり　耕民
戀人へ野菊一輪なぶられる　源太夫
夕暮れの野菊に蜻蛉疲れて居　青水

闌熟の姿に雞頭咲いて居る　鐵洲
雑吟　互選
女氣のやつぱり無理を聞いて居り　源太夫
日の丸の旗を異國に憧がれる　佳水
飛行機の宣傳ビラは山を越へ　鐵洲
末の子は廻らぬ獨樂に泣いて來る　同
茶柱を雛妓喜ぶ年になり　耕民
茶室から頭梁膝を撫でて出る　同
注射して兎も角電報丈ケは打ち　青水
プロペラの音を殘して雲に入り　一風
活動を出てはつきりと女を見　舌長
茶碗酒此頃吾のすさみ樣　同
移轉した跡にコスモス淋しかろ　聽松
本降りになつて詮なく桑を摘み　同

川柳雜誌社　螢ケ池支部句會（大阪）　松並光哉報

菊花薫る十一月七日午後一時より萬よし、二柳子兩氏を迎へ本祝氣分裡に句會を開く

兼題　土　産　二柳子選

一汽車　遲れ土産買ひ直し　菊三
荷造りの後へ土産を持つて來る　地湧子
待つてゐると知らず土産買ひ忘れ　湖舟
マーケット土産の品を迷はせる　葭舟
土産の包裝に訛りを見つけ　普門
末ッ子の方から土産渡される　同
御土産の前に伯父の子かしこまり　しげる
御土産と別に着換への一と包み　萬よし
當てさせてそれから開く子の土産　同

兼題　惡　戯　萬よし選

泣きみその辯に惡戯よくする子　光雄
惡戯の二字を殘して子供死に　波紋
惡戯に出す戀文に辭書が入り　葭舟
末の子は叱つても叱つても　しげる
惚れてゐる弱身惡戯さして置き　菊三
貼つたばかりの障子に穴を明ける　二柳子
惡戯が日日に伸びくる智惠盛り　光哉
割れたらし音惡戯のもう見ゐず　同
書風呂を子供プールにしてしまい　湖舟
惡戯をした子と見ゐぬ變顏なり　同
惡戯になればなつたで又困り　地湧子
逃腰で障子に指で穴を開け　同
惡戯が變にこじれて泣き出され　普門
惡戯な葉書が届く仲のよさ　同
惡戯な風が女を振りむかせ　同
（人）臨終とも知らず惡戯駈戻り　湖舟
（地）子の惡戯に父笑ひ笑ひゐる　二柳子
（天）惡戯をして父親はかまれてる　光雄
（軸）課長の惡戯へ給仕逆はず　萬よし

席題　立　腹　普門選

立腹の後へ眠れぬ夜が續き　菊三
立腹は茶菓子の方へ眼をやらず　萬よし
立腹に鐵瓶の湯が煮ゐかへる　二柳子
口答へ巡査益々腹を立て　波紋
人格がなぞと車掌に腹を立て　同
立腹の客へ女將の馴れたもの　しげる
（佳）立腹の後へ眼に立つかけ德利　恒風
（佳）腹立てゝ見ても他人の子ではなし　萬よし
（佳）病むまでは左程短氣でなかつた　しげる
（軸）立腹の父は氣まずい膳につき　普門

席題　メタル（相撲吟）　行司　萬よし選

二　點　句

勳章にメタルをやつて泣き止ませ　菊三
懸賞のメタル子供の自慢なり　しげる
メタル丈殘つて時計すりとられ　波紋
引出しの隅でメタルは錆びて居り　同

三　點　句

優勝のメタルへ笑顏寫つてる　地湧子
優等のメタル弟も貰つて來　同
大選手記錄と共にメタル殖ゐ　信二

四　點　句

酔ふた課長の自慢のメタル　萬よし

川柳雜誌社　平塚支部　十一月例會（神奈川縣）

兼題　旗　知美坊、娛鹿共選

旗一つへだてゝ席は敵味方　城月
旗音きいて事務とる老守衛　同
小さい手に日の丸持たせ女親　千代二
入營の旗ひらめいて老いの父母　同
日の丸の列ながゝと芽出度い日　駒人
失業の父賣出しの旗をもち　同
敗戰に應援の旗を卷いてゆき　城月
マラソンがすんで旗をばもてあまし　美知坊

兼題　二　城月、駒人共選

二度三度おまわりさせて菓子をやり　香川
二本松淋しい秋の風を受け　升水
カフエーで二度目は馴染にされてゐる　美知坊
二人だけ乘つて渡場景になり　駒人
叔父さんも見兼れた二人になつて居り　娛鹿
今更らと二人は口を揃へてゐ　同
二人目の子供にもある惡いくせ　千代二
二軒目の醫者は違つた見立てなり　同
家付の二言目には恩にきせ　香川

強意見二人でされる味を知り　娯鹿
(佳)この二人思案の埒を越えてゐる　同
二列車おくれて刑事後を追い　城月
(佳)餘生いくばく二度目の妻を淋しく見　同

川柳雜誌社
加古川支部　**めだか吟社**（兵庫縣）
十月廿二日　黄彩居偶會　山本洛陽報

奉　祝

奉祝の聲提灯と押し寄せる　泰山
町長の顔も混つて祝へや祝へ　同
灯の海へ日の丸一つ割つて入り　五彩果
同胞の親しく見える御奉祝　同
この騒ぎこの喜びに踊りぬき　洛陽
放送の聲も嬉しい奉祝歌　同
提灯の消えたも知らずついて行き　同
萬歳の灯は一杯に差し上げる　黄彩
奉祝の灯を喰ひ止めて山車は舞ひ　同

川柳雜誌社　**姫島支部句會**（大阪）
水谷鮎美報

兼題　暮の街　素人選

暮の街金を落したらしい音　賀名芽
舞妓には嬉しくもない暮の街　同
提灯がずつと並んだ暮の街　觀月
暮の街紅提灯が雨に濡れ　鮎美
髪結の鏡に寫る暮の街　石竹
暮の街賣出しの旗ちぎれそう　同
(軸)よんどころなく亭主つきあう暮の街　素人

兼題　黒子　かほる選

黒子のでかいのがあつて敵役　賀名芽
「濡髪」の黒子落すも母の慈悲　同
黒子まで書いて愛嬌者となり　觀月
黒子から十年振りの物語り　同　石竹
氣にして娘黒子をよう取らず　鮎美
ほくろ大きく素顔のまゝで逢ひ　同
襟あしに黒子を見せて女老け　同
忠僕のほくろに苦勞多すぎて　かほる
(軸)岡惚れの中はほくろも氣になつて　素人

兼題　男　親　素人選

男親強い強いと打たれてる　賀名芽
三男を頼りにしてる男親　同
男親さしあげるなり顔けられ　同
男親へ死んでもよいと泣いてゆく　石竹
障子張る手つき寒むそな男親　同
男親胃散と酒に生きてゐる　鮎美
出雲屋でほろりと酔ふた男親　同
ひき蛙に似たるかたちの男親　同
(軸)泣かしてこよが泣いて歸るが男親　素人

月二會例會（尼崎）

十一月九日　於木三居　竹本二水報

席題　赤　飯

胃腸の廣さを知つたあづき飯　木三
赤飯の前にもう片言が云ひ　吟女
お赤飯忘れたとこがもう一軒　同
赤飯にやれ笑つたの動いたの　二竹
赤飯と夫の顔を見比べる　同
三越で赤飯を食ひ誕生日　二水
赤飯をあてにしてゐる乳母のうち　同

兼題　爪

起訴された日の爪の色を見る　二竹
爪の色をみつめ私の死んだあと　吟女
職業を爪に知られる耻しさ　木三
又しても爪をかんでるさびしい日　同

川柳和合會（大阪）

松盛琴人選

題　蒲　團

小春日へ蒲團が膨れ上つてゐ　立市
(佳)燃える胸包む蒲團が夢を見せ　同
座蒲團を抱へて小供母になり　光
(人)腹立つて蒲團を敷けば塵がたち　太郎
(佳)夫待つ蒲團へ更ける夜蕎麥賣　同
(佳)出來上る蒲團に親娘笑ひ顔　方水
(天)兄の子は蒲團のしみを淋しがり　大地
(佳)夢うつゝ蒲團の方が離れてき　四五磨
其まゝの蒲團へもぐる獨身者　同
(地)添乳した蒲團あぶない形で出　同
客とめて蒲團の古い事を詫び　孫郎
紙屑屋破れ蒲團を買ふて去に　隆吟
獨身者蒲團の中で何か食ひ　同
薄つぺらな蒲團へ育つ子澤山　一雄
夜遊びはそつと蒲團へもぐり込み　同
(軸)美くしい小蒲團も出來産を待ち　琴人

雜　吟　琴人選

泥棒へ巡査小二丁ほどおくれ　光
葱の根を道々小供むしつてき　四五磨
お互にもう他人ではない氣持　一雄
(軸)新家庭今日は電氣へ房がつき　琴人

潮多浪武
愛子三氏　**歡迎句會**（須磨）
幹事報

十月六日

兼題　足　袋　互選

去年より足袋が少さくなつて居り　迷亭
外出に娘の足袋で間に合せ　愛子

病み上り足袋はいたまゝ寢てしまひ　柳人
白足袋の綺麗に動くお茶の會　武
もうハネの上つた白い足袋を脱ぎ　弘次
履いてから踊の足袋はトンと突き　内匠守
地下足袋で親方が來る火事見舞　はれる
お披露目の舞妓に足袋が大きすぎ　同

兼題　停車場　互選

故郷の驛から見える藏の壁　はれる
終列車驛夫淋しい聲を出し　潮多浪
停車場で赤帽に子供おんぶさせ　愛子
通過驛茨竹桃が咲いてゐた　はれる
停車場へ團体敷へ込まれてる　内匠守
停車場のストーブ階級打破が燃え　愛子
驛前の廣さへ印す第一歩　武
横面をはられたやうに通過驛　同
それとなく見送りに行く停車場　弘次

兼題　稻　互選

稻刈へあいそうの良い和尚なり　内匠守
悠紀田へ勿体なくも雀下り　はれる
稲のまだ青いうちから取引し　弘次
お天氣は上乘稻の中の挨拶　内匠守
自動車の故障稻田へ下りて待ち　同
丙午今年も嫁かず稻を刈り　はれる
疲れたよと云ふやうに案山子立ち　潮多浪

兼題　立話　互選

月が出て動き初めた立話　武
塀の蔦むしられてゐる立話　内匠守
田の畔を挾んで二人立話　潮多浪
立話氣になる方へ顔を向け　弘次
こげ臭いので立話飛んで入り　同
立話躾の糸をみつけられ　はれる
立話後の亭主忘れられ　愛子

兼題　ベンチ　互選

野外劇觀客ベンチの上に立ち　愛子
ぬくもりの殘るベンチへ腰をかけ　弘次
ベンチからどうしやうもない尻を上げ　武
すき腹へベンチの冷にが良くこたゆ　はれる
秋風が立つてベンチの客が減り　潮多浪
公園のベンチで明す家出の夜　弘次

第十六回　鼎康吟（神戸）

御大禮雜觀　互選

電飾の裏へ廻ればあつ氣なし　芳香子
物言はぬ子に花電車〳〵　郊村
背中から旗行列を嬉しがり　同
大典へ此の不景氣を悔ひるなり　千鳥
奉祝の繪ハガキ故郷へ綺麗すぎ　同

ジヤズバンド　互選

ジヤズバンド只それだけの面白味　芳香子
絶ゆるジヤズカフエーの夜も更け　同
すつきりとした光線にジヤズバンド　郊村
ジヤズバンドおいどを振つて終ひな　同
ダンサーを攫つようにジヤズバンド　千鳥
ジヤズの音と煙草の煙と女の香　同
ジヤズバンド何時か醉ふてる客の足　芳香子

圓タク　互選

圓タクの助手は頭を下げず開け　芳香子
そうでない杖へ圓タク腹を立て　同
圓タクを降りて小雨の中を行き　郊村
ガタ〳〵と圓タク無駄な樣にゆき　同
圓タクへ人を盛つてく宣傳車　千鳥
圓タクで少し時間を取り戻し　同

冬賀壽會例會（尼崎）

玄洋報　互選

鐵瓶、雜巾、針箱、火鉢

溜息の前に鐵瓶沸いて居る　虚白
大掃除課長も雜巾持つて居る　吉期
雜巾の腕にも時訂コチコチと　虚白
針箱に母はメートル貼つて居る　同
針箱は思出多きかたみなり　同
醉ふて來た客へ火鉢をのけてやり　吉期
新世帶火鉢で飯も炊いて居る　虚白

兼題　約束　眠　選聲

約束がなんだい少し醉ふて居る　玄洋
土曜日の午後と約束念を押し　同
約束が出來た二人は座を外し　吉期
約束の土産へ子供寢ずに待ち　同
醉ふてたと言はさず約束迫つてる　虚白
約束は來ても工面は出來て居ず　同
約束が外れてもどる寒い道　同
うつかりとした約束に妻の愚痴　眠聲
(軸)約束へあまり自分は氣が弱し　同

兼題　憤慨　眠　聲選

憤慨のあとは冷たい風が吹き　きくを
あんまりの事と友まで憤慨し　吉期
憤慨の當座無口が續ひて居　同
憤慨の締めた襟ははねもどり　虚白
憤慨のあとはいつもの樣となり　同
(軸)憤慨のきつぱり言ふて座を外し　眠聲

蒼梧舍例會（大阪）

拾月貳拾日　於實業會館　石川双葉子選

兼題　腕時計　ひろし選

腕時計意見の中を刻むなり　孤舟
腕時計後添ひの手によく狂ひ　稔
腕時計夫婦は別な勤め先　素人
湯上りの美くしく見る腕時計　鮎美
ひよろ高くなつて丁稚の腕時計　舟々
腕時計を外し今夜もねむれない　同
轢殺の腕に時計が動いてる　双葉子
腕時計今日は夫がはめて行き　同
（軸）逢曳の肉にくひ入る腕時計　ひろし

兼題　夢　素人選

夢さめてれつは出てゐる陽は赤い　武子
行けど〳〵も荒野ばかりの夢なし　石竹
繪の夢は子供の好きなものばかり　萩麿
現實へ覺むれば自分だけの夜　稔
恐ろしい夢からさめて向きを替へ　彩秋
夢からさめて妻を見てゐる　双葉子
夢なのに頭のヒンがぬけてゐる　新水
いゝ夢であつたが夢は夢であり　平八
夢ははかなし薄ら覺への母なりし　舟々
夢の壁唯肖像があるばかり　同
あゝ夢でよかつた障子陽があたり　源坊
正夢になればよいが汽車に乘り　同
良い夢が思ひ出せない朝の膳　蒼梧樓
夢の話に仲居はわざと眞顔なり　同
夢みることのしあわせに生き　ひろし
（軸）夢になと見ませよと女房あめで　素人

席題　大空　路郎選

大空へ兩手を高く男の子　武子
大空の奥へ心を走らさん　彩秋
大空高し子よ太れ〳〵　石竹
抱いた子に教へる空の廣すぎて　毒仙
大空へまだよくないと云ふ娘立ち　琴人
船の靜けさ大空を見る　双葉子
（軸）大空にまけてしまつた病上り　路郎

席題　大聲　二柳子選

病室で母大聲の子をしかり　陽喜亭
大聲の父へ腹立たしく戻り　孤舟
大聲叫べば重き上蒲團　毒仙
命になる話へ聲の大きすぎ　稔
大聲でどなるが腹はよい男　素人
つんぼフト大きな聲で返事をし　悪源太
大聲は筋の通らぬ議論なり　平八
大聲に探し廻ればかはやにゐる　琴人
大聲で叱れば被告恐れ入り　彩秋
大聲の父とはよく〳〵知り乍ら　武子
大聲に母は少しかんを立て　同
大聲になつて二人は立ち上り　双葉子
大聲を出して正直しかられる　同

席題　親切　互選

行先を問はれ親切先へたち　陽喜亭
親切に教へて悪く云はれてゐ　悪源太
親切な話しに三日程しあん　加香
親切に道教へられたが留守なりし　岱南
親切に云ふて呉れるは君ばかり　柳狂
親切はハッキリ俺れの身にこたへ　萩麿
寒暖のはがきはまづい文字ながら　彩秋
親切だなと肩をたゝかれ　石竹
親切は別れた方がよいと云ふ　琴人
親切に羽織の襟をおつてくれ　鮎美
親切がやう〳〵このごろわかって來　新水
親切にされて財布をにぎりしめ　源坊
あたたかい心に飢へてひげがのび　稔
親切の程度がすぎてうたがわれ　同

席題　誓文拂　互選

衣裳なく誓文拂晩にする　晩香
只ちやあるまいし誓文の人だかり　蒼梧樓
誓文の廣告だして高く賣り　岱南
誓文拂親父留守番云ひつかり　加香
子の服を誓文拂までまたせ　石竹
あいものばかり誓文拂賣れ　源坊
誓文へ女房の身重よく目立ち　舟々
買ひすぎて誓文拂チト困り　萩麿
誓文をサッ〳〵とぬけて立ち止る　稔
誓文に買はればはちの樣に買ひ　悪源太
誓文の町をにが〳〵しく通り　孤舟
誓文に女は別な命を出し　同
誓文拂旦那も聲が變つて來　二柳子
誓文拂紅提燈が一つ燒け　鮎美
灯がついてから誓文の派手に見へ　陽喜亭
誓文に女はゐらい力なり　素人
誓文の話あアさうか〳〵　同
誓文拂丁稚の聲に賣れてゐる　双葉子
誓文へあれがこれがと通りすぎ　琴人
誓文の景氣にさむいふところ手　同

電氣旬報柳壇　（大阪）

安井ひろし選

金策を濟ませて戻るいゝ月夜　花扇子
みのる秋日の丸の旗新らしい　松水
降りしきる雨を冒して行くも戀　ロン公
ガイと呼びハイと答へて悉なし　休歩
たかが女に惚れてをるのか　花情
終ひ風呂やはり顔から洗ふてる　同
失戀の顔につめたい襟の垢　同

編輯後記

△私は毎日遊んでゐる。遊んでゐると、餘所目には何んのこともないやうに見へる。自分でもなんかやれさうなところまでよくなつて來たやうな氣がする時もある。そんな時には雜誌の方もみんなに迷惑をかけてゐるので少し書いて見やうと思つて筆を採るが、さてとなると筆が一向進まない。矢張りまだ駄目だといふことを知る。筆を擱いて長嘆息をする。いかにも怠けてゐるやうに思はれることは苦痛だが、何も出來ないといふことを知つた時はそれ以上の淋しさだ。こんな時に代つて筆を採つてくれる友情をしみ〴〵ありがたく思つた。この意味で川村花菱、川上三太郎、椙元紋太その他の諸兄に感謝したい。

△私は毎日遊んでゐる。しかしいつまでも遊ゞではゐられないあたまがよくなるまでに糧食が盡きて落城しなければならないからである。目下働くべく考に耽つてゐる、同時に雜誌の方へも新年號へは是非何か書きたいと思つてゐる。さうすることが僕を買ふてくれる人々への第一の義務だと思ふ。獻身的努力!!!

獻身的努力!!! 路郎生)

△十一月號の編輯は十月十四日に終つたので、曠古の御大典を記念すべき句も少なかつたが、本號にはこの大禮に直面して、奉祝の誠をみせた句が多い。

△私は十一月一日上京し帝展や明治神宮野球戰を見、東京支部の柳路、千代二、仙湖氏と一夜銀座に會した、諸氏の御好意を感謝します。

△近畿句會多く毎夜のように案内狀に接する。參會者も多く八十名一百名を算する。當に句會時代とも云ふべきだが、量から質への轉換が必要だと思ふ。昭和三年の柳界を回顧して益々その感を深くする(ひろし記)

△別府支部では十月十八日夜創立句會を催されてなか〳〵盛會とのお知らせがありました。

△社友住田亂耽氏は十月二十五日信太山へ三日間商大高商部の軍事教練の演習に行つた

△堺支部では明治節の夜創立句會を大濱潮湯で開催、本社より路郎先生が出席されて講演をされた

△社友太田朝陽氏は九州方面へ旅行され香椎宮の繪葉書で便りがあつた

△平塚支部では十月十三日大磯へ吟行された(別項記事參照)

△社友中野柳陽氏(長春)は去る九日吉林へ旅行された

△社友高見柳骨氏は十月十五日復習から歸阪された

△社友松江町二氏から十一月一日近藤飴ン坊氏が來松されたとの便りがあつた

△客員川村花菱氏は十月十九日命澤に行かれ本社支部の人達と寄せ書をよこされた

△社友龜井花童子氏より十月卅一日初雪降るとの便りに「初雪は朝寢を笑ふように消ゆ」

△鳥取支部幹事中島鐵洲氏は十月廿二日來阪萬よし居を訪問されひろし氏と柳談をまじへて歸鳥された

△大連の中沼若蛙氏も亦萬よし氏を訪問されました

△神戸支部では十月廿一日甲子園阪神博覽會へ吟行を試みた

△不朽洞の東京出張所を東京市外杉並町高圓寺八二三に開設不朽洞の出版を取扱ふ事になつた

振替東京七六七八八番

△番傘川柳會では十一月九日夜御大典奉祝句會を催した

△京都川柳社では十二月二日奉祝全國川柳大會を催される

△社友横田眠聲氏は姫島支部幹事として永らく御盡力下さつてゐたが今回家事の都合で特別社友を退かれ相變らず句作に精進されるそうである尙姫島支部幹事は水谷鮎美氏と交替された

△糸屋町支部の八木毒仙氏は十一月四日女兒出生、喜久子と命名さる

△玉むし吟社の鳥山一庭氏は十月廿三日男子出生一矢と命名されたが翌一日をいて死去された惜しむべし「われゆかば高い山から手を擧げん」又一庭氏は十一月十八日午前一時四十分乘用自働車が汽車に衝突し人事不省に陷られたが幸ひ一命には別狀なし目下加療中祈全快

△鹽田大棗子氏は十月廿一日永眠されました(二柳子記)

移轉

大橋丸葉氏は大阪浪速區立葉町一二八八へ、西森蝸牛氏は高知縣高岡郡上半山村へ、中野緣哉氏は水戸市上市北三ノ丸一二六へ各轉居

改號

山口鐵庵氏は鐵三、西森廻天氏は蝸牛と改號

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第二號課題

十二月五日締切
（各題十句以内）

▼足音　前田雀郎選
▼賣家　庄萬よし選
▼子守　高橋かほる　太田朝陽　共選

第六卷第三號課題

一月五日締切
（各題十句以内）

▼小使　篠原春雨選
▼咳　麻生葭乃選
▼取次　岩本素人　八木毒仙　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも貰ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年十一月廿五日印刷
昭和三年十二月一日發行

第五卷第十二號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替穴阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤（函館）石塚
（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本 高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

洋裝美本 全一冊 定價 五十錢 郵稅 二錢

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五六二番

清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和三年十一月二十五日印刷納本　昭和三年十二月一日發行

川柳雜誌（第五十九號）　定價三拾錢

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

定價 壹圓（送料拾錢）

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になさいます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（葭乃）

川柳とは何ぞや――の數萬言を聽くよりも本書を繙け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳漫畫　累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの――。

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの――。

「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの――。

不朽洞製

句帖

（近く發賣）

▲ふと湧出づる句境を遁さぬため絶ねず此の句帖を懷ろにしてゐて下さい。

▲自分の句、先輩の句、又は古人の句を書拔くためにも好適の句帖です。

▲定價金四拾五錢　送料金六錢

不朽洞

東京市外杉並町高圓寺二八三
振替東京七六七八八番

大阪市西成區千本通五七の
振替大阪五二五八五番